

○そりはし 空穂物語 藤原の君、十七「池ひろし。

うゑ木あり。そりはし、つりどのあり」隆信集、戀四

「せんえう殿のそりはしに」源氏少女「らうわたどの  
そりはしをわたりて參る」夫木抄、十九、雜、西  
行上人「さらにまたそりはしわたす心ちしてをふさ  
かゝれるかつらぎの山」

○ぞれあひ 今女奉相對にて通じあふを、ぞれ  
あひといふ。昔は、とれあひとやいひけん。漢書に對

食の字をとれあひと訓たり。連合の通音なればその  
意なるべし。漢書、外戚傳曰「房興、官對食」應劭註  
曰「官人自相與爲夫婦名對食。房興、官者二人名  
也」

○それたかを、そらしたる云々今「氣がそれた」「心がそ  
れた」などもいへり。(猶「そゝる」を參照せよ。)

○そろく へなく 出雲風土記、意宇郡

國引坐る條云「上畧三身之綱打挂而。霜黒萬聞々耶  
々爾。河船之毛々曾々呂々爾。國々來々引來。縫  
國者自去豆乃打絶而八穂米支豆支乃御崎也云々」

此もそろは眞徐の意にて、今俗にそろくといふ語

に、眞の發語の添たる也。へならくも黒葛よりつ  
りきたるもて、今云と同語なる事しるし。猶此文の  
總の考へは別に出せれば、こゝには省て引り。

○そん損 空穂物語、藤原の君八「くちをしう  
もの、つひえある事をかぞふれば、おほくのそんな

○存 今奉存候など云、存は、存在とつゝきて、  
物のそのまゝに在を云。今思ふと云所を存するとい

ひて、奉存候などいふは、存知の二字の意なるを、  
知を一字省きしより其義遠くなりつる也。但し存と  
いひなははしたるも久しきことなり。明月記「嘉祿  
元年十二月廿三日云々。答云。本自有此由不顧涯分  
可申入由。許讓退出云々」

## たノ部

○たい 見たい、きたい、いひたい、じれつ  
たい、逢たい、などのたいなり。是は痛の上略にて。

痛なるを、音便にたいとはいふなり。音便の時、きの  
いに轉するは、后宮きさきの宮を、きさいの宮、書  
てを、かいてといふが如し。さて此たきといふをそ

ふる言、雅言にも、めでたき、うれたき、うしろめたき、などはいへど、俗言には殊に多かり。萬葉集に、戀しきといふ所を、戀痛といへる所、二所三所見えたれば、しきと同じく、其言をつよく勵ましていふ辭也。忠見集十七「夢をこそねざめの程にかたりけめ見たくまてにも聞えけるかな」

○だいがい 萬葉集七十七「大海に嵐な吹そ」また十八丁、また二十二丁、十二十一丁、十一三十七丁十七八丁、二十五十七丁にも出。

○大海を手でふせぐ 庚信賦云「長河一決不可、可障之以手」古今六帖「人の心をいかだのまん」と云句に凡河内躬恒「手をさへてよしのの瀧はせきつとも」

○たいき大氣 催馬樂青馬に「またいこんこのたいきのわらはの云々」とある、眞淵云「眞大膽子之大氣童也」

○大吉日 大智度論云「今日大吉歡喜日」

○大逆無道 史記云「項羽放殺義帝於江南」大逆無道

○だいこく 大國主を大黒とする事も久しきこ

と、見えたり。親長卿記「長享二年十一月八日。夢中歌件湯山明神三輪明神也。始來臨影向之時。御姿

爲、大黒柱云々」家の中の柱を大黒柱といふは、大國柱のよしか。二祖國生の段に「行廻逢是天之御柱而云々」是を書紀には「國中之柱」とも

「國柱」ともあれば也。神社にては是を心御柱といへり。是も中央を古く身屋といへば、もと身柱の義なるを、中心の意以て字を替たるものか。大方の人

太極柱の謂に説なせるはなか／＼の牽強なるべし。

○大慈大悲 維摩經云「不離大慈不捨大悲」

○大夫 伎藝云 繼世繼に、花園左大臣の御家に、管絃をよくするものどもを多くめしおき給へりし事をいへるところにいはく「ふき物ひき物せぬはすくなくて、ほかよりまゐらねど、内の人にて御あそびたゆることなく、伊賀大夫、六條大夫などいふすぐれたる人どもあり云々」

○大富長者 佛祖統記云「世稱大福長者」無住が雜談集云「鳥羽法皇を伏見に御幸なしまのらせ、

○道者 社寺參詣の旅人を、道者といへり。小朝熊社神鏡沙汰文の中に、天福二年の文書の言に「熊野詣道者、下總國白井郡住人、南無妙房」

○堂上方 石林燕語「古者天子之居總言宮而不名。其別名皆曰堂明堂是也。初未有稱殿者。秦始皇作阿房甘泉未央亦以宮是殿も堂もかよはしいふ見而阿房甘泉未央亦以宮是殿も堂もかよはしいふ語也。」

○田歌 藤原爲忠朝臣集「早苗とるころしも小田にをりはへてうちしきりなく田歌鳥かな」

○たう／＼たらりら 笛譜に「たう／＼たらりら」風俗の歌の節にもとれり。又今翁の謡物に「ちらりやたらり、たらりちりや、たう／＼たらりら」と

云ことあり。東見記下「林道春於武州淺艸文珠作詩。題記里鼓。詩中有三韓人字考工記字又有三都雲行山の坂路乃登り極たる處を云。其所にては神に手

物たてまつらんとて、大福長者にて、藏どもおほきを見せまゐらす」とあり。本朝にては家富たる者を長者と思へり。但し祖庭夏苑「稱長者具三十德」一貴姓。二高位。三大富。四威猛。五智深。六年者。七行淨。八備禮。九上歎。十下歸」此説によれば、家富る者のみをいふにあらず。

○大名 和名抄云「松明。唐式云。每城油一斗。松明十斤。今按松明今之續松乎」とあり。たいまつは焼松の音便、ついまつは字の如くつぎまつ也。

○大名 白川顯廣王記、安元二年四月條云「諸國大名不應國役」とあり。大名と云名はやく其頃有しにこそ。しのびね上「大みやうのことも、はしこしろみなれば、うけひききこえしに、かゝるにおもひつきぬること」

○道具 讀岐日記「道具などとりのけて、皆人々うちやすめておりぬ」

○詩 手向の音便なり。萬葉三に「佐保過而寧乃手祭爾置幣者云々」本居氏云「多牟氣とは、越行山の坂路乃登り極たる處を云。其所にては神に手

詳在「謂府臘字條下」一書或云「とうくたらり」とは、外夷の樂の名也。都曇答臘といふ。都曇は腰鼓に似て小也。答臘は蜡聲也。この事白孔六帖に出たるちりやたらりの類と合せて、此たうくたらりらも、猶笛の音をうつせることきこゆ。これを又謠物に添たるは、催馬樂大宮の歌の末に「たりやりたん」又酒飲に「たんなりやたんなりちりうな」とあるを、注に笛譜也とある類ひなるべし。笛は其謠に合するものなれば、其譜を以て拍子を取べきはもとよりなれど、外國の樂の名を以て拍子とらん事いと物遠し。よく此類をあはせ考ふべきなり。

○たうどの鳥と、ほんの鳥と、わたらぬさきにななくさなづな、手につみ入て、かうしとちやう。此七種のはやし詞、諸書にいろくに出て、一様ならず。今も國所により大同小異あり。其が中に、定家卿の桐火桶にし給へる、尤も古しとすべし。かれ今類從本に載する所を出しつ。さて此詞を唐土の鳥と日本の鳥と心得て、歲時記に「正月七日。多

るものかな、日本第一の家にてこそあれといふ事也。今誤て若菜をはやす時、唐土の鳥と云は此事なるべし」

○たかうといへばおぶさろといふ 神樂譜早歌

「谷からいかば。をかゝりいかん。岡からいかば、谷からいかん。又これからいかば、かれからいかん。かれからいかば、これからいかん」

○たかうな たかんな 箕を云。字鏡に「箕

箒太加牟奈」和名抄に「箒。亦作箒。和名太加無

奈」とあり。箒は本竹菜の義なるを、音便に牟を添

てたかんなどいへるを、其牟を又字に轉じて、たか

うなどいひなせる、大方音便の常也。さて菜とは食

ふ時の名にて、常は竹子とのみ歌にもよみこしを、

竹う菜といふは食料の時の名也。魚も其物の名にい

ふ時は、うを、いをなど云を、食料の時は魚釣など

の如く、たゞ菜とのみいへり。さかなも酒菜の義な

るなどに合せて知べし。

○たかつき 萬葉集十六(能登國歌)所聞多禪乃机の島の小螺といひろひ持參てから鹽にこゝともみたかつきにもり机にたてて母にまつりつや云々 伊勢物語

「高坏にもりてかしはをおはひて、いたしたるかしはにかけり云々」

○高瀬舟 三代實錄四十六、元慶八年九月條「十

六日癸酉。令近江丹波兩國各造高瀬舟三艘。長其二

艘長三丈一尺廣五尺。二艘長二丈一尺廣五尺。二艘

長二丈廣三尺。送神泉苑」夫木抄、舟三、雜、登蓮

法師「なには江にくだすたかせのこす棹にいくたび

たちぬかもの村鳥」

○たかね 新撰字鏡に「鏹太加禪」

○互先 今基にたがひせんといふことを、續世

繼に「ゐごならばかたみせんにてぞよく侍らん」と

あり。

○たかへら 「かなべら」を見よ。

○たかやす 新撰字鏡に「稻穡耕也。田加戸済」

とあり。田反の意なれば、今たがやすといふは讃れ

る也。

○たからぶね 濤異阿彌覺書曰「貞孝之御調進節分御舟繪所ハ、一兩年上京、小川扇屋に被書候歟。

又其後狩野法眼弟子峰右近と申仁御披官人御扶持人候。其峰にかゝせられ候云々」伊勢安齋曰「古代ノ

鬼車鳥二度三家々。越門打戸。滅燈燭之などいへる類、皆あとかたもなき附會也。又近來の人もいろくにさたして、佛書、天文の書等を引て云るあれど、一つも義理の通れるなし。凡かく都鄙おしゃべり事にもあらず。又久しき程に訛り傳へたる事もあるべきは、その載る處の書どもの一樣ならざるものて知べし。今いかなる事とも聞しりがたかれど、其大略をいはゞ「遠所の鳥と庭邊の鳥と不喰さきに、七草齊手に摘入て」といふほどの心にて是迄の五句は詞也。結の一句は、まな板を叩て如<sup>フ</sup>此シトントヤンといふ拍子なり。今もストトントンなどいふ是也。南嶺遺稿第三「七草のはやし詞は、殿うつりといふ草紙にある事、清少納言枕草子に「物語は鶴まつり殿うつり云々。むかし歴々の館を建られ、段々新殿へ移る事なり。その殿うつりに、今宵はとしの夜なり。いざものはやせんとてうたひける。たうどのとみや日本富やとぞうたひける云々。」これ新殿へうつる年の終に祝して唱ふる詞也。貴くも富

書ニ寶舟繪ヲ正月枕ノ下ニ敷「所見ナシ。巽阿彌ハ江戸ノ同朋大永天文ノ頃ノ人也」といへり。げにも古き事とはおもはれず。大江戸はじまりて後のことがあらん。さて此たから舟の繪を枕の下に敷てぬる事。温古日錄、年中重寶記等には、節分の下に載て立春の夜のわざとせしを、續江戸砂子、温古名跡等には、正月二日の條にたから舟賣を載せたり。江戸はもとより然なりけん。或書に云「此事の正月二日の夜の事となりけるは、商家よりの流布せしなるべし。商家は大晦日の夜はよもすがらいねざる故に、元日をむなしく過し、二日を元旦とする故に、二日の夜を初夢とするなるべし」といへり。さる事にやあらん。

○たからをすりにあづくる 性理大全に「朱子曰。是猶家有明月之珠夜光之璧。委之衢路之側盜賊之衝也」

○たかる 「蠅がたかる」「虫がたかる」などいふも古き言也。古事記上卷に「宇士多加禮斗呂々岐豆」とあり。但しこゝに多加禮とあるは、今の言の格なれば、多加理といふべきを、禮とあるは、離れ

はなり、恐れ、おそり、亂れ、みだりの類ひの云ざまにて、古言の一格なるが、猶此言鳥虫などのみにもあらず。人多加理などもいへり。

○たかんな 「たかうな」を見よ。

○たかまつきて火さゆる 法華經云「佛此夜滅度。如薪盡火滅」

○たきもの 夫木抄、三、春、源仲正「世の常のつま木はこらじ春山の梅の匂ひをたきものにせそはてぬる」

○たぎり湯を面にかける 宇治拾遺三丁「たぎり湯をおもてにかかるやうにおぼえて」

○澤庵漬 或書云「澤庵漬と云名は大根にかぎれり」世事談と云書に「和尚の制し初られたり」といへれど左に非す。和尚の墓一箇の圓石にして、其石の形大根の香の物に似たり。故に此渾名をおふせたるが、和尚の名とともに世に廣く弘りたる也。和尚は只近世の人なり。香の物は古くあるべし。世事

と云ことを播磨國のあたりにてはせきをたくると云となり』

○たけ 菖蒲 常盤姫物語「まつだけ、ひらたけ、くなめす、き、かのした、しひたけ、しめじたけ、くはたけ、ねすみて、月夜だけまでもくは、やな」庭訓往来「松茸 平茸」今昔物語十二「和多利ト云フ茸必ズ死スル物也ト聞テ、山ヨリ取り來テ密ニ食フ」同廿八十八「和多利ノ事アリ可考合。日本紀略、一條帝寛弘二年四月八日。今日福田院別當雅靜依大臣請來宿東洞院土御門邊之間。今朝食之。八人醉臥。其中二人死。死後六人存命。京中貴賤觀者

盛有秋香乃吉者」

○たけ 開 山家集上「たけのぼる朝日のかけのさすま、にみやこのゆきはさえみさえみ」

○竹馬 新撰六帖、六、知家「竹馬におきふしなれしそのゆきはふれどもわすれやはする袋草紙談條壬生忠見幼童之時、内裏より有召、無ニ乘物」とて難參之由を申。然ば竹馬に乗りて可參之由有御定。仍進此歌「竹馬はふしがちにし

談の説の如きは最負の引たふしと云べし。さて澤庵和尚は但馬の産にして、名を宗彭又は冥之と稱す。東海寺の開祖也。正保二年九月圓寂せらる。其墓の石を見て此名をさとるべし。

○たくはへ 賢を訓む古言也。萬葉集、十九二十に「わたつみの神の命のみくしげに多久波比於但豆いつくとふ玉にまさりて云々」空穗藤原の君廿九「そのものをたくはへていちにあきなは、こそかしこからめ」

○たくましき 夫木抄、廿六、磯、寂蓮法師「あらいその岩もとゆすり立波のたくましきまでぬる、袖かな」

○たぐり吐 古事記、上「多具理邇生神名金山毘古神」日本書紀に「爲、吐」と書り。傳釋云「萬葉二に「たけはねれたがねは長き妹か髮」又十四に「こまはたくとも」十九に「馬たきゆきて」などよめるに同じきか。繩などをたぐると云も搔上る意ありて同じ。喰噎のくりも此くりと同じ。俗に歐氣をせくなりといひ、兒のよだりをもくるといひ、又咳をせく

ていとよわし今夕かげにのりてまゐらん』五雜俎云  
「唐太宗曰。土城竹馬兒童之樂也」白樂天詩『一見  
竹馬戲。每思童駭時』劉後村詩『只作初騎竹馬看』

注「竹馬小兒騎以嬉戲也」

○たけがら井序 夫木抄、十五、秋、寂蓮法師

「松がねのたけがらゆけばもみぢばを袖にこきいる  
、山おろしの風」愚昧記『安元三年九月廿六日 取向  
光明寺爲狩三松草也。山上候假屋<sub>竹柱草</sub>於此所<sub>益酌</sub>

所<sub>益酌</sub>

○たける 茲賤き者の怒りなどして、聲高に罵る詞をたけるといひ、たけりちらすなどいふは、健又八十梟帥などの猛き威勢の方より轉れるなるべし。古事記、日代宮段「熊曾建。出雲建」神武紀に「八十梟帥。梟帥此云多稽屢」とある是也。

○たこ 紙鳶は天暦天延の頃は和訓なかりしに

や。和名抄「紙老鷗。辨色立成云。紙老鷗<sub>此間云</sub>以

紙爲鷗形、乘風能飛。一云紙鳶」とのみあり(猶「いかのばり」を参照せよ。)

○たこ 今居り多古などいひて、物にすれて肉の強くなるを多古といへり。こは馬牛の荷すれの多

○たしなまセラル、「たしなめ」を見よ。

○たしなみ 高野日記「りんぢゆをもわがたしなみにおもふなよむかへとらんのちかひたのみて」著聞集五「成源僧正連歌をこのむ人にて、其房中の者ども皆たしなみければ云々」

○たしなめ たしなまセラル、「人の惡しき事せし時、ちとたしなめともいひ、又人にたしなま

せられたともいふは、厄<sub>タチ</sub>せらるゝ方よりいふ詞也。

古事記上卷に「如此令<sub>タチ</sub>汝苦<sub>タチ</sub>云云々」書紀に、厄

字又「辛苦」「困厄」「劬勞」などを訓り。

○たすきすがた 拾玉集「それもいさつめにあらしむ言のはのしひしとりおくたすきすがたに」

○たゞ今のほとけ 菊花物語<sub>さまくび</sub>の「權成の

辨もいみじうひじりにて、ただ今の佛かなとみえき

こえおこなひけり」

○たゞう紙 藤原爲忠集「ある所へいきけるにあるじつれぐなる事をいひ出て、やがてすゞりをよせた、う紙をいたして、春雨といふ心をよめといひければ云々」園太曆に、徳大寺前内大臣より公賀大臣にくさぐの事とも問たまへる條々の中に「一

胡より出たる歟。和名抄云「陶隱居曰。鹽有三九種。柔鹽療馬瘡瘍。俗云多胡」

○たご 荷ひ桶をたごといふは、もと田子<sub>か</sub>荷ふ桶なるが、やがて其物の名となれる也。たとへば小刀をほうとうといふも、もと庖丁<sub>がつか</sub>ふうつはものなるから、直に庖丁とよべるが如し。此外海部にすむ人を、直にあまといひ、棚機をおる人を、直にたなばたとよぶ類常に多かり。『猶「ほうてふ」を參照せよ。』

○たこ

あゆみ

西行和歌談抄<sub>蓮阿</sub>『児のたこくあゆみしたる躰の歌「鶯となはなはなくそちやほしき小なへやはしき母や戀しき」

○田子桶

「かうべ」を見よ。

○慥成

萬葉集十二<sub>丁</sub>に「慥使乎無跡」出

雲風土記

鳩根郡手染鄉<sub>タシ</sub>に「所<sub>タシタクラン</sub>下大神命詔。此國

者<sub>タシカ</sub>

所造國<sub>タシカニナリ</sub>」<sub>ト</sub>在詔而。故丁寧負<sub>タシカ</sub>給而。今人猶誤手

染鄉<sub>タシカ</sub>云耳<sub>タシカ</sub>古事記の歌に「たしくにゐねてん後に」

とも「たしにはゐねす」とある、是も慥かの意也。

○慥成

拾遺集「吹はらふもみちのうへの霧はれてみねたし

かなるあらし山かな」

○戦<sub>タガ</sub>を見て矢矧<sub>タガ</sub>夫木集、やはぎの浦、よみ人しらず「軍みて矢はぎのうらのあればこそやとを隔てゝ人はいるらめ」

○たゞく

壇川院百首、權中納言國信「みむろ

山谷に

や春のたちのらん雪の下水いはたくなり」

○たゞ事にはあらす

宇治拾遺三十五「猶さても

たゞ事にはあらざりけり」

○たゞすむ

夫木抄、十二、秋、源行賴「身を

つめばあはれとぞきく夜もすがらたゞすむ鹿の曉の

聲」

○たゞむ

疊む也 山家集「月さゆるあかしのせと

に風ふけば冰のうへにたゞむしらなみ」

○たゞら

空穂物語、吹上「いもしの所をのこ

どもあつまり、たゞらふみ、物のこがた鑄などす。

三百五

國風のしからしむる所也。

○たちざい 順政集「我のみか松のねたげにこのはを立、聞波のうらみやはせぬ」

○立處云々 遷却祟神祭詞に「又遣志。天若彦休臥之時也中矢立死」一書に「云々以立死」

○毛反言不申氏。高鳥殃爾依豆立處爾身亡支

○たちどころなき人 落書露顯序「たちどころなき人にわびきては心得がたく侍り」

○立どころに死す 神代紀に「子時天稚彦新官休臥之時也中矢立死」一書に「云々以立死」

○たちながら 「たちかへり」を見よ。

○たちのく 夫木抄、十五、秋、藤原忠房「いややないはでのもりの柞原へだつるきりはたちものくやと」

○たちはしり立走 萬葉集五二十遣唐使餓別歌に「難波津にみふねはてぬと聞えこば紐ときさけて多知婆志利勢武」今も俗言には此言常にいひて、兒童が上にも、使にも、急にもいへり。

○たちふるまひ 俗に立居の容躰をたちふるまひといふは、起居威儀と書べき歟。安康紀云「今妾

しろがね、こがね、しららうなどをわかつてしるがね、古今集諺詩歌「いそのかみぶりにし戀の神さびてたるにわれはいそねかねつる」  
○たれ 竹取物語「目もたれにけり」文選風賦「得目爲曠」  
○たちかれ 萬代集、雜三、前大僧正道慶「袖山の楓のたちかれ枝をなみおのれぞしろき雪はたまらず」  
○立かへり 立ちながら 俗に人のもとへちよと行を立かへりに往くといひ、又立ながらと云も雅言也。兼輔集に「しきたへの枕にちりのるざるかも立かへりにぞ人のとはまし」とあり。又萬葉集六「關なべてかへりにだにも打行ていもが手枕まかまし物を」此かへりにだにもとは、俗に立かへりなどいふに同じ。立ながらは源氏物語櫛卷に云「けふあすとおぼすに、女かたも心あはたゞしけれど、立ながらとたびく御せうそこあり云々」空穂物語、内侍かみの巻に「立ながら内へも入らぬ初秋をやがてしらする風ぞあやしき」とあり。上古の雅辭など曾て知らぬ人の口にかゝる古語どもの傳はれるも、

等。顏色不秀。加以情性拙之。若威儀言語如毫毛不似王意。豈爲親乎云々」威儀の字ふるまひとよめり。  
○たちまち 相模集「いざよひもたちまちにやはいづるまでねまちの月をふして見る哉」

○たちまふ 夫木抄、十八、冬、後德大寺左大臣「をみ衣みたらし川にかけみえてたちまふほどにあけぬこのよは」  
○龍はなる神のるるが國にては雷は龍也といふ。竹取物語「龍はなる神のるるにてこそ有けれ」  
○たつぶり たらふく 物の多くさはにあるをたつぶりといふ。たふく、たらふくなどいふたらふくの音便なり。たふくの條に出。

續日本紀宣命に「東南之隅」また「西北之方」  
○閻 建具 刺 刺 戶をたてともさすともいへる、閻と刺と差ある事也。萬葉集三四十「豐國乃鏡山之石戸立隱爾計良思待杼來坐奴」賀茂氏云「上代には戸を常は傍に取退置て、閻むとては其を持來て

しるがね、こがね、しららうなどをわかつてしるがね、古今集諺詩歌「いそのかみぶりにし戀の神さびてたるにわれはいそねかねつる」  
○たれ 竹取物語「目もたれにけり」文選風賦「得目爲曠」  
○たちかれ 萬代集、雜三、前大僧正道慶「袖山の楓のたちかれ枝をなみおのれぞしろき雪はたまらず」  
○立かへり 立ちながら 俗に人のもとへちよと行を立かへりに往くといひ、又立ながらと云も雅言也。兼輔集に「しきたへの枕にちりのるざるかも立かへりにぞ人のとはまし」とあり。又萬葉集六「關なべてかへりにだにも打行ていもが手枕まかまし物を」此かへりにだにもとは、俗に立かへりなどいふに同じ。立ながらは源氏物語櫛卷に云「けふあすとおぼすに、女かたも心あはたゞしけれど、立ながらとたびく御せうそこあり云々」空穂物語、内侍かみの巻に「立ながら内へも入らぬ初秋をやがてしらする風ぞあやしき」とあり。上古の雅辭など曾て知らぬ人の口にかゝる古語どもの傳はれるも、

等。顏色不秀。加以情性拙之。若威儀言語如毫毛不似王意。豈爲親乎云々」威儀の字ふるまひとよめり。  
○たちまち 相模集「いざよひもたちまちにやはいづるまでねまちの月をふして見る哉」

○たちまふ 夫木抄、十八、冬、後德大寺左大臣「をみ衣みたらし川にかけみえてたちまふほどにあけぬこのよは」  
○龍はなる神のるるが國にては雷は龍也といふ。竹取物語「龍はなる神のるるにてこそ有けれ」  
○たつぶり たらふく 物の多くさはにあるをたつぶりといふ。たふく、たらふくなどいふたらふくの音便なり。たふくの條に出。

續日本紀宣命に「東南之隅」また「西北之方」  
○閻 建具 刺 刺 戸をたてともさすともいへる、閻と刺と差ある事也。萬葉集三四十「豐國乃鏡山之石戸立隱爾計良思待杼來坐奴」賀茂氏云「上代には戸を常は傍に取退置て、閻むとては其を持來て

しるがね、こがね、しららうなどをわかつてしるがね、古今集諺詩歌「いそのかみぶりにし戀の神さびてたるにわれはいそねかねつる」  
○たれ 竹取物語「目もたれにけり」文選風賦「得目爲曠」  
○たちかれ 萬代集、雜三、前大僧正道慶「袖山の楓のたちかれ枝をなみおのれぞしろき雪はたまらず」  
○立かへり 立ちながら 俗に人のもとへちよと行を立かへりに往くといひ、又立ながらと云も雅言也。兼輔集に「しきたへの枕にちりのるざるかも立かへりにぞ人のとはまし」とあり。又萬葉集六「關なべてかへりにだにも打行ていもが手枕まかまし物を」此かへりにだにもとは、俗に立かへりなどいふに同じ。立ながらは源氏物語櫛卷に云「けふあすとおぼすに、女かたも心あはたゞしけれど、立ながらとたびく御せうそこあり云々」空穂物語、内侍かみの巻に「立ながら内へも入らぬ初秋をやがてしらする風ぞあやしき」とあり。上古の雅辭など曾て知らぬ人の口にかゝる古語どもの傳はれるも、

等。顏色不秀。加以情性拙之。若威儀言語如毫毛不似王意。豈爲親乎云々」威儀の字ふるまひとよめり。  
○たちまち 相模集「いざよひもたちまちにやはいづるまでねまちの月をふして見る哉」

○たちまふ 夫木抄、十八、冬、後德大寺左大臣「をみ衣みたらし川にかけみえてたちまふほどにあけぬこのよは」  
○龍はなる神のるるが國にては雷は龍也といふ。竹取物語「龍はなる神のるるにてこそ有けれ」  
○たつぶり たらふく 物の多くさはにあるをたつぶりといふ。たふく、たらふくなどいふたらふくの音便なり。たふくの條に出。

續日本紀宣命に「東南之隅」また「西北之方」  
○閻 建具 刺 刺 戸をたてともさすともいへる、閻と刺と差ある事也。萬葉集三四十「豐國乃鏡山之石戸立隱爾計良思待杼來坐奴」賀茂氏云「上代には戸を常は傍に取退置て、閻むとては其を持來て

○たてはき 「はおり」を見よ。

○だてら 狹衣、一上四十「法師だてらかくあなたなるわざをしたまへば」といへり。今世にも女などの似つかはしからぬわざするを、女だてらといひ、又子どもだてらなどもいふと同じ。

○店 棚見世棚也 今商家を店といひて、其見世の人を店者といふ。和名抄「店都念反。俗云。東西町是也。坐賣物舍也。崔貌古今注云。店置也。所置貨鬻物也」土佐日記<sub>家柄本ト歎</sub>二月十六日、けふの夕さりつかた、京へのばるついでに見れば、山崎のたななる小概のゑも云々「空穂物語第四、藤原君卷<sub>流布本第七魚鹽前ノ物</sub>たかもの御子の商ひし給ふ事をいへる所に云「こゝはみづし所、寢殿の北のかた、かしら白き女ひとり水くむ。めのわらはひとりをものほりつかまつる。これはて、たなに女をりて物うる中むな車にいをしほつみてもてきたり。あづかりども、よみとりてたなにするてうる云々」勸進聖判職人歌合<sub>天文六年ヨリ少シ前ノ物</sub>「はるは又所も花の千本に見せる棚の鳥のいろく」<sub>此歌にて見世棚の名義明か也</sub>庭訓往來に「市町者通辻子小路。令構見世棚」

○たなきやう 「たまつり」を見よ。

○たなきやう 古語拾遺云「令三天羽槌雄神織ニ文

○棚機 布。令棚織姫神織ニ神衣所謂和衣

○七夕に七遊をする事 親長卿記「文明五年七月七日、今日有七種事。一鞠。一揚弓。一樂。一鄧

曲<sub>仍改闇奉子</sub>「無之。一和漢五十和歌兼日七首一七盃飲

○七夕の歌梶の葉にかく事 管見記「嘉吉元年七月七日辛丑丑晴。七種詠書梶葉。手向二星了」

○七夕祭 繼日本紀「天平六年秋七月丙寅。天皇觀相撲戲。是夕徒御南苑。令文人賦七夕之詩。賜祿有差」とある、是七夕の事の國史に見えたるはじめ也。萬葉集の歌、懷風藻の詩等はもし此時より以前なるがあらんも知がたし。是はもと漢土の名義は、雅言の部に委しくいへり。こゝには俗例の故事也。そのよしは荆楚歲時記其外これかれの書に出たり。又たなばたとも、たなばたつめとも云類の名義は、雅言の部に委しくいへり。こゝには俗例を少しことはるべし。日次紀事三云「七月七日世稱七夕。武家并地下良賤各著白衣。修慶家々。喫索麵。又互相贈」續江戸砂子温故名跡志一曰「七月七日七夕祭云々。此日童子小女のわざに五色の紙を

色紙たんさくにたち、歌を書いて若竹の筆にむすび高かく、七夕に手向也。是をたんさく竹といふ。此國上方の國がたにてはなし。梶或桐の葉に歌を書

で川へ流す事有「温故錄七云「梶葉書之歌。是は此國の風俗に七夕の歌を手向に、芋の葉の露を硯に滴て梶にかくなり」日本國風五に「芋葉露主水司献」按

するに公卿も亦如<sub>レ</sub>此。梶葉七枚に歌七首を書。其梶葉を索麺にて結給ふと也。今や地下にもまたこれに倣ふ。

○狸のはらつゝみ 夫木抄廿七雜、寂蓮法師

「人すまでかねもおとせぬ古寺にたぬきのみこそみうちけれ」

○たぬきね 「むじなのひるね」を見よ。

○田主 夫木抄、十二、秋、惠慶法師「さなへとりおのがつくらぬ秋のたをかりにきぬとや田ぬしとがめん」

○種かす 堀河百首、木工頭俊頼「秋刈しむろ

のをしぬを思ひ出て春ぞたなるに種をかしける」

○種まく 堀河百首、中宮權大進仲實「谷水をせく水口にいぐしたて五百代小田に種まきにけり」

○たねをどる 萬代集、懸五、和泉式部「たねをとる物にもかなやわすれ草かれなばかゝる跡もあらじを」

○たのむこかげに雨がもる 夫木抄廿一、源光行「是ぞこのたのむ木のもと岡べなる松のあらしも心してふけ」

○たのむのせち 辨内侍日記<sub>後深草院寶治元年</sub>曰「八月一日、中宮の御方よりまわりし御たきもの世のつねならずにはひうつくしう侍りしかば「けふは又そら焼

物の名をかへてたのめは深きにはひとぞなる」此歌に八朔を既にたのみとよせたるを見れば、此名も古き時よりの事也。名義は田面の實のりをかつぐ見そめて、侍よろこぶより出たれば、田面の節の意か。又田の實といふを頼むに兼ていふにも有べし。小町集に「實なき苗の穗にふみをさして人のもとへやるに「秋風にあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬとおもへば」

○たばかる 今俗に云所は、人を欺きはかる方ひと方に轉じたれど古くは何事の上にも思ひばかりてするをいへり。竹取物語「くらもちの親王は、心

たばかりある人にて、おはやけには筑紫の國に湯あ

みにまからんとて、いとま申て云々「蜻蛉日記四」い

ではなれたるついでに、しゆるたばかりをもせばや

とおもふに、先此ほだしおばえて懲しうかなし」

○たはけ　たはけ者　愚痴なるをたはけといふ

は、奸くる方より出たる歟。允恭紀に「奸」安康紀に

「淫」などありて、男女の交通の義に違へるをすべて

いへり。但し字鏡に「奸乱也。犯淫也。多波久」又

「妬太波留」とも見え、萬葉集廿に「多波和射」續紀

宣命に「狂」などある多波氣、多波留、多夫留、皆

本同言なるべければ、狂亂、放逸の類をいふも活用

にて、變轉にはあらざるにや。凡て男女の交通の義

に違へることなるを、大かたの上の義に違ひ道に背

けて、痴愚たる行跡するを云やうになりしにや。又

いわけなきといふと合すれば、たわけなきと云が、

上下省りたるか。此時はたは發語、わけなきいで、

理りに昧きを云なり。されど猶上の奸の轉と見たる

方よからんにや。又接に、たはわざなどいふたはよ

り出たる詞なるべし。萬葉集、廿六丁に「いざこども

たはわざなせそ」とあり。これ即及びもなきさかし

ら事するをいひて、今云たはけにやゝ似たり。猶考  
ふべし。

○たはけもの　「たはけ」を見よ。

おやづる　おやく　おひやる

たはごとくは今も専ら云詞也。能登國の人の言にお

やづるといへる事あり。おやづるとは、いかなる事

を云にかと問たるに、人の欺すを云といへり。古語

の妖言と云ことの遺れるなるべし。續日本紀宣命に

「およづれかもたはごとかも」萬葉集三五丁「狂言加

我聞都流母」また六十「逆言之狂言等可聞」また八丁

「狂言登加聞」また十三「狂言哉人之言鈔」など

あり。江戸の女詞に、人のをかしき事めづらしき事

およづれのおよをおや／＼と轉じて、本はさる事は

世にあらじとなじる詞なりけんが、終には聞おどろ

く程の發語とはなりしにや。但し是はいまだ極めず

ふと打おもふまゝに先たゞいひおく也。又人を欺き

そやしたてるをば、おひやるとも、おひやらかすと

も云。是もかの態と人のおやづるといへる類にて、

此妖言を音便にいひ頬せることにはあらじか。新撰

便に志多宇豆と云習へるより、上の志を省き、字を布に轉じて、終に多毘とは訛れりしなり。又和名抄に「單皮履云云。今按野人以鹿皮爲半靴。名曰多鼻。宜用此單皮二字乎」とあり。此多鼻の名を傳へて俗字を宛たるか。江家次第、また中右記等に赤脚見苦敷と有て、夏冬ともに著が禮儀なりし也。

然るに後奈良院の比より、夏は著ぬが禮儀と心得達ひせし事、鷲尾隆康卿の二水記に見えたり。又こはきのある足袋は、足利慈照院殿の記錄にも、十里單衣とありて、遠足の時の物なれば、座敷にてなくべくひせし事、鷲尾隆康卿の二水記に見えたり。又こはらねば、さすがにあはれとやおもひけん、やがて此僧を以て持佛堂へいざなひ入て、踏皮行膝ぬがせ、足洗せて、おろかならぬ躰にて置たりける」同五大

落宮熊野落之事「案に相違して、いつならはせ給ひたる御事ならぬともあやしげなるたびは、さわらうをめして、少しもくたびれたる御けしもきなく」老人難話江村事「木綿踏皮は、今之製法の如くなるは之太久頭」字鏡に「機械也志太久豆」是を後には音

○たび所 神の御旅所也。今略して御旅といふ。

榎葉日記「いつとなき御旅所かな」嚴島詣記「みたりといふ松原に御たび所をたてたり」源氏物語須磨宿「かゝるたび所ともなく人さわがしけれど」コレハカタヒ

也。

○足袋のしき 足袋の底をしきといひ、又草履、雪駄などいふ物にもしきといふ。催馬樂貫川に「くつかはせんがいのはそしき」とあり。足にて踏敷所ゆゑに云かともおもへど、しき、そこ普通へば底の意なるべし。

○たびやかた 夫木抄、卅五、雜、正三位季經「うかれめのうかれてある、たびやかたすみつきがたき物にぞありける」(猶「やかた」を參照せよ。)

○たぶさ 歌にたぶさとよむは、たゞ手の事也。僧正遍昭「折つればたぶさにけがるたてながら三世に佛に花たてまつる」衣笠内大臣「みどり子がたぶさの中のもみぢ葉をあるものがほにしるもはかなし」是も掌中のよしによめる也。權中納言匡房「衣うつ槌の音こそたぬむなれたぶさに霜の置にや有らん」さるを世俗には、髪を指て、たぶさといひ、又

たぶさの毛をつかむなどもいへり。これら其握む手の方より轉れるにやとおもへど、邊土の人の、凡て髪をたぶさと云ならへるをおもふに、こは多岐布佐と云し古語の、岐の省れるにて、手とは元より別なりけり。神功紀に「タケアカ髮中」景行紀に「タカクスダカツニ箭藏三頭髻」

崇德紀に「作四天王像置於頂髮」などある是也。

今按に、髪を揚るを多具といへば、髪の總やかかるをしか云なるべし。凡て總とは物の多く繁に云て、紐の總、又麻の古名布佐、又たゞ詞の上にも統集むるを布佐奴と云などを思へば、頭髪は實に總と云べきもの也。既に多岐布佐と云古訓のあるからは、省

きて是を多布佐といはんもひが事ならず。又手を多布佐と云は、萬葉に「シロタケシタシ鉤著手節」とつけたる、此手節を轉じて云歟。又手も指五に分れたるもて、是も總の意もて云歟。言の出所還て髪にいふ方正しきに似たり。又云神樂取物、篠の歌に「みづ垣の神の御代よりさゝのはをたぶさにとりてあそびすらしも」但しこは古本に太布佐止止利天とあれば、本太具佐爾止利天とありけんを、誤りたるも知がたし。

○たぶく 催馬樂、總角に「あげまきや、と

うく、ひろばかりや、とうく、さかりてねたれども、まろびあひけり、とうく、かよりあひにけり、とうく、「祕抄云「とうくは歌の節也」考云「とうくは早々といふなり」とあり。今案に、此ととうくは節に添たる詞とも聞えず。又速々の意としても聞えず。又かの笛譜なるたうくたらりらの類にもあらず。字都保物語、俊蔭に「ゆめたぶくに人に見せ給ふな」また「おもふ心ばへありてなり。たふくにきこゆべきにもあらず」また「ことはさる世の一なればたふくにせね」とありて、此次にも卷毎に多くいへるを、いかなる詞なるらんとおもひわたりけるに、武藏國幸手のかたはとりの方言に不不斷、澤山などいふ方にもいへり。かの空穂にいへるをちく、皆々の心もてよく合ひたり。右の總角なるも、多く一尋ばかり避りて寐たれども、つひにまろび逢ひたりといふ意として聞えたり。かゝれば古本に太字、太字と書る如く、太の假字にて布を字といへるは、例の謡ひもの、音便なるなり。又「とどうねかひがみちた」などいふ意を見ても、よく聞

こえて」

○たぶて 「つぶて」を見よ。

今昔物語云「信

ゆるさまなれど、これは止まりといふ言の訛りにて、止の留といふ意の略なれば、もはら後世の俗言にして、此時代に云べき言ともおぼえず。かゝれば此たうたうは右のたうくたらりの類とはもとより別なり。混すべからず。

○たぶく しのびね、下「しろくたぶくとこえて」

○たぶる ところに土つかむ

浪守藤原陳忠といふもの、任國におもむき任をはつてのばりけるが、坂をこゆるとて、橋より谷におちりたり。家人も上よりみやりたるまでにて、ついに飛入ことならず、ためらふところに、はるかの谷そこにさけぶことあきこゆ。よくきけば、猿籠になはをつけておろせ、乗てあがらんといふ也。郎等共悦て、猿籠に繩おほくつけておろせば、しばしありて引あげよといふ聲するに、心得てひきあげしかば、平糸籠を籠ひとつ入り。又籠をおろせといふことをするに、さしおろすに、此たびは陳忠籠にのつて

片手はなはをとり、かた手はひらたけ三もちながら

引あげられぬ。郎等ども其ひらたけはいづくに候しと問は、されば落たるところにおほくおひたれば、見すてがたくて、手のおよぶかざりとりて、籠にいれてあげつる也。これをとらすんば、たから山に入ながら、手をむなしうして歸りたらんこゝちぞせん。倒るゝ處に土つかむといふ諺にかなへりとぞたはぶれける。

○たべもの 拾遺、雜春「松をはしにて、たべ物を出して侍けるに輔」

○たべる 飲食する事をたべると云は、もとは主君貴人に對て云しことにて、即其貴人より賜りて食ふよしの詞也。中昔の物にたび、たぶ、たべと活かして、常に「ものたうべ」「酒たうびて」など多くいへり。今たべると云は、俗言の格にて、雅言にはたぶるといふべし。式の月次祭詞に「長平久作食留五穀平毛豐爾令筈給比云々」

○たべゑふ 空穂、藏開、下「なりたゞ一日あさましくたべゑひてたいめんたまはりけるを」

○たばたをたわ 女の髪のつとを、東國には、昔はたをといひしを、近年はたばといへ

名なり。萬葉に、山のとかげとよめるも、山のたわ蔭なるが如し。さて今此たををたばと訛りて、つひに女をさして云言とさへなりたり。又云萬葉十三丁に「峯手折丹」十八三十に「夜麻能多乎理爾」などあれば、たをと云べきを、横音に奉れて轉じたるなり。又男より女を指てたばといふ言もあるは、中昔の比

髪長といひつると同じ心ばへなり。

○たまげ おどろく事をたまげといふは魂消也。竹取物語「御子はわれにもあらぬけしきにて、

きもきえぬべき心ちしてゐ給へり」此膽消と同意也。○卵モモ石モリをうつがごとし 吳子云「伏雞之搏狸。乳犬之犯虎。雖有闘心隨之死矣」

○たまさか 新古今集、戀一、長方「きのくに共行。道遇水。定伯令鬼先度。聽之了無聲音。定伯自度。灌作聲。鬼復言。何以聲。定伯曰。新死不習度。故爾勿恠吾也。行欲至宛市。定伯便擔鬼著頭上急持之。鬼大呼聲咋々然。索下不復聽之。徑至宛市中下著地。化而爲二羊賣之。恐其變化。爲並睡之得錢千五百。乃去。于時石崇言。定伯賣鬼得錢千五百文。

○玉のうてな 新勅撰集、天喜四年閏三月中殿に「既新成櫻花歌」けふぞみる玉のうてなのさくら花のどけき春にあまる匂ひを。源氏物語真木柱「か

のゆふのみなとに拾ふてふたまきにだにあひみてしがな」後拾遺集、春上、伊勢大輔「うるつきつまほしさはたまきに君がとふ日のわかなりけり」萬代集、戀四、よみ人しらず「こじまなる名をたまさかのたまさかに思ひ出てもあはれといはなん」

○たまだすき 古今集「ことならば松もはずとやはいひ果ぬなぞ世の中のたまだすきなる」

○玉にきす 菊花物語月宴「女にてみたてまつつきたらんやうに」源氏物語十六「女にてみたてまつらほしうきよら也。いとかうしもおはへ給へること、心うけれど、玉の瓶におはさるゝも」春宮也同玉かづら「かたちはいとかくめでたくきよげながら、あ中びこちぐしうおはせましかば、いかに玉のきすならまし」淮南子云「夏后氏瓊之不能無考。明月之珠不能無類」

○魂しひをぬかる 宇治拾遺二二三「鬼に玉しひとられたるやうにて」

○たますに手なし 列異傳云「南陽宋定伯年少時。夜行逢鬼。問曰誰鬼。尋復問之。卿復誰。定伯誑之。」

○玉のこゑこがねのひき 白氏文集「遺文三十一軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名」

しうきすぐ也」

○玉のこゑこがねのひき

白氏文集「遺文三

○玉の盃 補中抄、四せせ「その事をば釋せず。

玉のさかづき底なきこゝちして侍り」

○玉のさかづきそこなきごとし 金樓子云「桂華無實。玉卮無當。抱朴子云無當之玉不<sub>レ</sub>如全用之庭地」

○靈祭 棚經 日次紀事三曰「七月十日自今日

至十六日。人家設棚安<sub>ニ</sub>各位之牌。修<sub>ニ</sub>孟蘭盆會。其

式載<sub>ニ</sub>飯器於公卿臺。破子加牟奈加計并供<sub>ニ</sub>茶葉香

華<sub>ニ</sub>而祭之。又以<sub>ニ</sub>鼠尾草灌<sub>ニ</sub>水而拜之。是謂<sub>ニ</sub>向水。

其家之宗門僧徒來而誦<sub>ニ</sub>經於牌前。是稱<sub>ニ</sub>棚經也」と

ある。此鼠尾艸をもて水を手向る事、古き時よりの

習はしなるべし。藻蘆草に「水かけ艸とは、みそは

ぎの異名なり七月十五日忌水の義也」藏玉集云「水

懸草はみそはぎ「たれもたゞ今日やるらんとしご

とに水かけ草の露のまに／＼とあるにて知べし」

年中行事歌合中云「孟蘭盆、前大納言「けふとてやくらの司もそなぶらん玉まつるけふのふ月なかば

に」四季談七月「なきたまつる事はひとゝせにあまたゝびある物から、わきて此月のまつりはとしのを

はりよりもいやそひてかなし」日本歲時記、卷七「引周處風土記云。除夜祭。其先祖長幼衆飲祝頌而散。

謂之分歲」後拾遺集哀傷「十二月のつごもりのよよみ侍りける、和泉式部「なき人のくるよときけば

君もよしわがすむ宿や玉なぎのさと」詞花集、冬

曾根好忠「玉まつるとしのをはりになりにけりけふにやまたもあはんとすらん」新古今集、雜上、俊成

老ぬとも又もあはんと行年になみだのたまをたむけ

つるかな」後撰集、哀傷「つまの身ばかりてのとしのしはすの晦日、ふることいひ侍ける、兼輔「なき

人のともにしかへるとしなみはくれ行けふはうれしからまし」かへし、貫之「こふるまに年のくれなば

なき人のわかれやいととほらざるらん」

○たまり水 夫木抄、廿六、雜、源仲正「ゆく

かたもなき山のゐにちる花のたまり水ともなりにけ

るかな」

○玉むし 夫木抄、十九、雜、よみ人しらず「浦

ちかくよるこぐふねにともす火のかげかとみえてひかる玉むし」

○玉藻前 扶桑略記「仁和四年六條皇后有<sub>ニ</sub>御

惱夏」相應和尙行年六十。依<sub>ニ</sub>召參。彌御加持三個

日。夜不<sub>レ</sub>動<sub>ニ</sub>居處。永忘<sub>ニ</sub>眠食。四日曉皇后舉<sub>ニ</sub>音叫

喚屈<sub>ニ</sub>身宛<sub>ニ</sub>轉寢<sub>ニ</sub>殿殆欲<sub>ニ</sub>頗倒<sub>ニ</sub>。此問靈狐現<sub>ニ</sub>形出<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>斗帳乾角<sub>ニ</sub>東西南北往反走迷。爰太政大臣并諸人恐懼戰栗五情失<sub>ニ</sub>之。依<sub>ニ</sub>乞<sub>ニ</sub>和尙誦<sub>ニ</sub>解脫咒<sub>ニ</sub>震動已止。

迷狐僅脫。皇后惱已以平復。勅賜<sub>ニ</sub>度等被物等<sub>ニ</sub>俗間に九尾金毛狐、或は玉藻前など云めるは此御事を

もれき<sub>ニ</sub>て、狂言綺語に作れる空ごと也。

○たまらず 夫木抄、廿七、雜、和泉式部「お

もはじをあれたらやどにかきくらす雲のいがきに風したまらず」曾根好忠集「かまと山雪はひまなくふりしけど火のけを近みたまらざりけり」

○たまる 水のたまる、又俗に金をためるなどいふも是也。源順集、戀「なきたむるなみだは袖にみつしほのひるまにだにもあひみてしがな」六帖「ひとりねの床にたまれるなみだには石のまくらもうきのべらなり」後撰集秋中、貫之「ころもではさむくもあらねと月影をたまらぬ秋の雪とこそみれ」同「朝ごとにおく露袖にうけためて世のうき時のなみだにはぞかる」同秋下「もみぢはにたまれる鷹のなみだには月のかけこそうつるべらなれ」

○たむる 墓後拾遺集、雜五、實方「みちのく

のあだちのま<sub>ニ</sub>君にこそおもひためたることはかたらめ」

○ためる 木匠などの木の曲を見るをためるといふは、曲見の義なるべし。曲りくねりたるをたみといふは古事也。萬葉一<sub>ニ</sub>五丁<sub>ニ</sub>安禮乃崎榜多味行者とよみたるは、榜曲りゆげは也。十一丁<sub>ニ</sub>一岡前多未足道乎<sub>ニ</sub>などあるは、曲りくねりたる道なり。拾遺集物名、したゞみを隠して「東にてやしなはれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれど」とある、是も訛をよこなまるといふ如く、言の横に折るをいふなれば、曲る意同じ事也。

○たやすさ 「こり」を見よ。

○たゆげ 新朗詠、九月盡、好忠「をしめどもたちもとまらぬもの故にたゆげにまねく花すゝきかのべらなり」後撰集秋中、貫之「ころもではさむくもあらねと月影をたまらぬ秋の雪とこそみれ」同「朝ごとにおく露袖にうけためて世のうき時のなみだにはぞかる」同秋下「もみぢはにたまれる鷹のなみだには月のかけこそうつるべらなれ」

よせとはおもはざらんわたつうみのいのる心は神  
ぞしるらん」按に、たよせとは其所まではゆかずし  
て、かりに手よせの所にてものするを云。たとへば  
住吉の浦を過るほど、御社に詣てんに、たよりあし  
きまゝに、ござ過る船ながらぬさ奉るやうの類を云  
也。

○たらしき 長たらしいなどいふ帶訓。又あい  
たれるなど同格。

○たらちめ 元輔集「すみがまのけぶりに身を  
手洗の約也。伊勢物語に『女の手洗ふ所にぬきすを  
やたくへましわがたらちめもさてぞたえにし』仲文  
集『たらちめのむかしのおやはさもあらばあれさて  
やはうまのかみのこはよき』俊頼口傳『たらちねは  
母、たらちをは父』

○たらひ 和名抄「盥。俗用『手洗二字』盥は  
手洗の約也。伊勢物語に『女の手洗ふ所にぬきすを  
うちやりて、たらひのかげに見えけるを云々』新撰  
六帖、衣笠内大臣「老にけるほどもはかなし朝ごと  
のたらひの水にうかぶおもかげ」千五百番歌合、土  
御門内大臣「しのぶともよそめやいかにあさてあら  
ふたらひの水の影もはづかし」

○たらふく 柳樽 德利 古事記、朝倉宮段歌に  
「淡美能哀登賣、本陀理登良須母」傳云「秀鷦<sup>セイシラ</sup>取も  
なり。鷦<sup>セイ</sup>は、もと酒を盆に注ぎ入る、器なり。説文  
尊注<sup>ハシマ</sup>酒器とあるにて知べし。尊と鷦樽と同じこと  
也。此方にて多理と云物も、古は酒を注ぐ器なりし  
故に、此字を當たるなり。されば古の鷦<sup>セイ</sup>は後世に、  
瓶子、銚子などを用る如く用ひたりしなり。然るに  
後世には、樽は酒を入置器となりて、注ぐ器には非  
す。又瓶子は、和名抄に加米とありて。古は酒を注  
ぐ器にあらず。銚子は佐之奈閉とありて、酒器には  
非す。然るに此二、後世には酒を注ぐ器となれる、  
皆古へと後世と、其形も用ひざまもうつりかはれる  
なり。かくて此多理と云名の義は、垂にて、其口よ  
り酒の垂り出るよしなるへし」といへり。今案に瓶  
子を俗に德利と云も、其口より垂る、音の、とくく  
と鳴出るよしにて、登久々々垂を省きたる名なるべ  
し。寛永の比の風俗歌に「とくとくと、酒を垂して  
とくもてこ、とくりなければ夜があけぬ」といふ歌  
あり。又昔今にして器の用ひざまのかはる事、行燈、

挑燈の類のみならず、藥灌の茶器となりしが如し。」  
今俗問婚儀の時、家内喜多留など、義を以ては書な  
れども、音訓混じて拙きならひなり。さりながら、  
柳樽といふ名はもとよりある事也。鄧那代醉篇「柳  
櫻也」曹植詩云「我有柳樽瓢」又此柳は蒲と同じ  
くして、蒲樽は周禮ニみゆ。雅筵醉狂集、春柳「風  
の枝まけてやなびく樽の名の柳とながき酒のちから  
に」尺素往来「例式指樽一個、鈎樽柳樽兩三、樽破  
子、取着風情可<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>用意候」

○だるい かいだるい かたるい 今手足  
のたるいなどいふは、たゆきの訛也。曾丹集「わざ  
もこが今朝の朝菜にひかされてせなさへあまりかひ  
だゆき哉」伊勢集「屏風、夜ひとよ物おもひたる女  
の、つらづゑつきたる所「よもすがら物おもふとき  
のつらづゑは、かひだるさぞしられざりける」此歌  
夫木抄には、三四の句「手枕はかいたるさこそ」と  
有。今此二首を合せてかいたるいといふは、肘たる  
きの略語なり。たるしとよめるめづらし。かゝれば  
ふるき時よりたるしともいへりしなるべし。今東國  
の苦賤き人はかたるいといへり。又此たるきはもと

「たゆきの轉じたる詞なるべし。古今集、戀四、小町  
「見るめなきわが身をうらとしらねばやかれなてあ  
まのあしたゆくくる」拾遺集「しめてこそちとせの  
はるはきつ、みめ松をてたゆくなにかひくべき」金  
葉集、春、藤原經通朝臣「いまはとてこしちにかへ  
るかりがねははねもたゆくやゆきかゝるらん」源重  
之集「天の原わたるちどりのはねたゆみきしをかは  
とも見てかへるかな」藤原仲文集、侍從君「手もた  
ゆくたゞく水鶴ものこらねば猶ねぬなはのくるやく  
るしき」小大君集「よひしの夢の玉しひあしたゆ  
くありかでまたんとぶらひにこよ」

○たるがき 月庵醉醒記云「柿の漬は酒をそ  
ぎてねかしおけば、間もなくとるゝもの也。近來樽  
柿とて、酒樽に納てよき柿をうる云々」

○たるもの 正月の餅を酒樽に納てかこふ也。  
曾呂里狂歌咄一卷云「南都諸白と書つたる一樽、  
はるく、飽<sup>カク</sup>られるは、併<sup>カク</sup>好る人には氣がはたら  
かす。我等酒を好み事は、日頃よく知ながら、名  
物なればとて南都諸白うれしからず。今宵の客衆の  
仕合と、主不興ながら封を切てみれば、酒樽に餅を

つめて越けるにぞ、上戸どもはおどろきちからをおとしぬ」

○たれがし 今昔物語「たれがじとかやいひける兒を」

○たれにみせよとべにかね 今童謡に、君にみせんとべにかねつけるとうたへる、萬葉集九二十一〔七丁〕に「君なくばなぞ身よそはんくしげなるつげのをぐしもとらんとおもはす」毛詩云「自伯之東」首如三飛蓬豈無三膏沐「誰適爲容」

○たれる あまたれる、あいたれるなどいふ垂也。

○太郎 次郎 三郎 四郎 空穂物語 藤原の君女九ところまつ宮のおほい君、太郎次郎三郎四郎とりつゝきうみ給ふ。大いとのに九郎、宮に十郎大いとのに十一郎中の君云々」伊勢物語 堀川のおと太郎くにつねの大納言云々「燒亡に太郎次郎と云ことあり。清獅眼抄後清錄記曰「治承二年戊戌四月廿四日戊子、夜半許七條北東洞院東中許洞院面燒亡中世人號三次郎燒亡也。太郎去年四月廿八日至大極殿燒亡」

奕也。簾をとりて、賭ある遊は博奕なるべし。是攤打とも云也。但攤は他丹反たんの音なるべし」

○たんがく 肥後國にて墓をたんがくといふとぞ。古の多遅具久の訛りながらのこれる也。

○だんき 源氏物語須磨「だんきの貝など」後漢書「梁冀能彈碁」或者經云「彈基兩人對局。白黑各六枚。先列碁相當更先彈也。其局以石爲之」古今詩話曰「彈碁有譜一卷皆唐賢所爲。碁局方二尺中高」李商隱詩云「玉作彈碁局中最不半謂其中高也。道士席謙吳人善彈碁」和名抄「彈碁。世說云。彈碁指石」始自魏官文帝於此伎耳好矣」源氏物語椎が本「こすぐろくたぎのばんどもとり出て」

○短冊 「野路のむらさめ」 墓京集云「細川勝元朝臣より短慮不<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>功といふこゝろばえをとひ給しかば、太田持資「いそがすはぬれざらましを旅人のあとよりはる」

○短冊 國史、令式等に、短籍とある物は木札なり。中昔の書に、短冊といへるは、物の題名、目録などかく小牘なり。枕冊子十二「此おはする人の家のやけたりとて、いとほしかりて給ふめるとてとら

○たわづくる 「たば」を見よ。

○たわづくる 金葉、戀上「物いひける女の髪をかきこしてみけるをよめる「朝ね髪たが手枕にたかたりきかせそ」新院「から衣かさねしよその手枕につけてけさはかたみにふりこしてみる」續詞花集

戀下「朝ねがみわがつけそむる手枕のたれとか人に

わづけてけさはかたみにふりこしてみる」新撰六帖「人とはよいかゝはのべんあさねがみけさ手枕にたわづけにけり」壬二集、中「青柳のかづらき山の朝ねがみたがたわづけて春風のふく」

○たを

「たば」を見よ。

○田をうつ 堀河百首、阿闍梨隆深「くはゐ生る野澤の荒田打かへしいそげるしろは室の種かも」

○たをれる 金葉集、戀下「よみ人しらず「あし引の山のまにくたぶれたるからさはひとりふせよ」

○攤打 萬物故事要訣三「冷然草に攤打ん事をおもふとあるは如何讀べき。攤と書は誤也。攤なるべし。攤とは双六牘の博奕の事也。とは賭博と釋せり。賭とはのりもの也。物かけもの也。博とは博

せり。せたれば、なにの御短冊にか侍らん。物いくらばか

りにかといへば、まづよめかしといふ。いかでかためもあきつからまへらではといへば、人にも見せよ

云々」明月記「天祐二年九月一日。賢寂送<sup>ニ</sup>御佛事目錄。御佛三尺地<sup>一</sup>御經<sup>六部</sup>寫<sup>六部</sup>布施導師浮線綾被物一重<sup>薄物</sup>絹裏一。絹二十。短冊一枚。題名僧十一口。」めのと

の冊子「むかしは帶たんざく、にはひぶくろ、水引をば、やない箱にするさぶらふ。近きころは、たんざくより外はすゑぬ事にせられ候」これら皆かの小牘の類なり。南朝紀傳、建德二年<sup>北朝應安四年也</sup>三月十一日。先帝の三回忌につきて、宸翰の短冊をあつめ、

その裏に法花經をかき供養す。導師大僧正頼竟<sup>竟</sup>たり。その時の歌に「かきおきしむかしの春のことのはに御法の花をけふはそへつ」此歌にむかしの春のことにとばにとあれば、右の宸翰の短冊は、既に御歌書おかせられたるやうにも聞ゆれど、此時いまだ歌かく事あらざれば、たゞかの小牘の類に、何となく書おかせ給へるを集めて供養したりし也。是をひとへに歌の短冊と心得て、短冊は南朝の比よりおこれりとおもふはひが事也。歌かく物となりたるは、此時よ

り八十年ばかり後、足利の普廣院殿よりおこれる事、ものに慥かに見えた。東常綠聞書云「短冊に歌書事などは書し也。今歌かくものとなりし初は、京都將軍普廣院殿<sup>源義公なり</sup>富士御覽に御下の時、不破の關屋のあれし故に、御もてなしのためあらたに葺かへたりければ、見給ひていとけなくおばしければ、「ふきかへて月さへもらぬ板びさしはやすみあらせ不破の關守」此歌を短冊にし給へるが殊にできさせ給ひぬとて、これよりもはら短冊に書き、はゝも壹寸八分などさだむるやうになりたり」此事此御時の富士紀行のうら書にもしるしたり。元龜年中の草紙に「たんざくはもとわづかばかりの事をしるし、自らのおぼえともし、公より書いて給ひもしたるものなるを、近き比は歌かくものとなりたり。つたへいふ所は、普廣院殿よりおこれりといへど、あまねくかくは此ごろなり。今も札に用ふる事は猶、もはらのこりたり云々」かゝれば世に頓阿、兼好などの短冊とてもてはやすは、いかゞあらん。おぼつかなきものなり。續日本紀「天平二年春正月辛丑。百官主典

中院御説に「短冊に歌書事などは書し也。今歌かくものとなりし初は、京都將軍普廣院殿<sup>源義公なり</sup>富士御覽に御下の時、不破の關屋のあれし故に、御もてなしのためあらたに葺かへたりければ、見給ひていとけなくおばしければ、「ふきかへて月さへもらぬ板びさしはやすみあらせ不破の關守」此歌を短冊にし給へるが殊にできさせ給ひぬとて、これよりもはら短冊に書き、はゝも壹寸八分などさだむるやうになりたり」此事此御時の富士紀行のうら書にもしるしたり。元龜年中の草紙に「たんざくはもとわづかばかりの事をしるし、自らのおぼえともし、公より書いて給ひもしたるものなるを、近き比は歌かくものとなりたり。つたへいふ所は、普廣院殿よりおこれりといへど、あまねくかくは此ごろなり。今も札に用ふる事は猶、もはらのこりたり云々」かゝれば世に頓阿、兼好などの短冊とてもてはやすは、いかゞあらん。おぼつかなきものなり。續日本紀「天平二年春正月辛丑。百官主典

以上。

陪從踏歌且奉且行。引入宮裏。以賜酒食。

因採<sup>ニ</sup>短籍。書以<sup>ニ</sup>仁義禮智信五字隨其字賜是小札にて、除秘抄に「切紙絹付結緒也」と有に合すべし。或書云「天文十一年八月三日、河内國若江城主若江河内守實高が方より、菅丞相の遊されし短冊とて<sup>小紙ナシ。長サ六寸二分、巾八分也</sup>。今日屋形に献す。其歌に「ながれ行我はみくづとなりぬとも君しがらみとなりてとゝめよ」右の歌は、菅家昌泰四年正月二十七日左遷の時

此一首をよみて、寛平法皇へ奉り玉ふ一首也。屋形甚だ自愛有て、これは天下無雙の物なりとて、二條晴義公に申、委細ことわり書を加へて、佐々木の御

社に納め奉れると云」

○丹前<sup>タマツチ</sup> 今歌舞伎の狂言に、丹前と云名あり。これは、江戸<sup>町ノ北通今ノ雄子</sup>に堀丹後守殿の第宅ありし故に、其地を丹後殿前と唱へしとぞ（寛永九年の江戸繪圖にて考るに、今津田山城守殿の第宅なり）其頃此邊の風呂屋に湯女を置て客を招し也。然るに江戸に其比、六法組とて壯年の俠夫、大小立髪の異風なる出立にて、此風呂屋の道を徘徊せしかば、是を丹前六法風と呼けるは、丹後殿前の略語なり。今も此

又「琴はさる世の一なれば、たんくにせねど」などある、此たんくは今云ごとく、何れも多き事、數なる事を云。音便にたうともたんともいひなせるなり。猶下のたんくの條にも云を見合すべし。

○旦那<sup>タマダ</sup> 書言故事云「僧道稱<sup>ニ</sup>施主。曰<sup>ニ</sup>檀那。梵語陀那鉢底。唐言<sup>ニ</sup>施主。云々」今旦那と書て、僕

従より主人を指て云は、則此檀那より移れるか。然れば施主と同じ事なるを、其施主は亡者の人主の事となりて、別のごとくなれり。又菩提寺を檀那寺と稱するもうらうへのたがひ也。

○だんまつま 斷抹磨 断末摩 世俗に死

期の苦痛の甚しきを断抹磨の苦しみと云。智度論に云。こは催馬樂酒飲に「酒をたうべて、たべるうて

、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと 子供の詞に物の多き事をたんと、ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる 藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはたんくとなる」

○たんと

子供の詞に物の多き事をたんと、

ひときさみの位をだに贈らせ給ふなりけり

○たんくとなる

藤原爲忠朝臣集「五月雨につゝ、みの滝の水まさり岩うつおとはた

俗語考

一切身分相互割裂。徒足至頂分散如、塵苦痛難忍」

ち  
ノ  
部

故事要訣云、「物にちを付るといふは、乳、

○ち  
可  
用也。耳字を書也。耳字にあまたの訓あり。

「の  
也。聞り。  
など

一切身分相互割裂。徒足至頂分散如塵苦痛難忍

## ちノ部

○ち 故事要訣云「物にちを付るといふは、乳字可<sup>レ</sup>用歟。耳字を書也。耳字にあまたの訓あり。

知とも、波多とも、伎久とも讀也。日本紀に、鼎耳の乳などには必ず耳を用る也」とあり。今案此等は只字の穿鑿にて、言の意を解す。こは輒にまれ簾にまれ、其物に釣を付る也。都理の反、知と約る。即神代紀に釣字を知と訓たり。

○中元 唐六典「道士齋有七名云々。其四曰三元齋。正月十五日天官爲上元。七月十五日地官爲中元。十月十五日水官爲下元」

○中間 武家の奴僕を中間といふは、奴婢をはしたといひ、賤者をはした者といふよりうつりたる歟。そは萬葉集に「あらそふ間に」といふを「安良蘇布波之爾」ともよみ、書紀に間字をはしとよみ、姓の間人をも「はしひと」とよめる類にて、はしは中間の意なるから、其字を文字ごとによみたるが、

一の名となれるにや。はしたの事はは部に委くいへり。永仁三年にしてるせる布衣記と云ふみに「若黨中間。跡士下着召具」また「中間事。折鳥帽子小結常也。染直垂二大帷ヲ重、袴ニハ大口ヲカサネ云々」などいへり。按に近來は、武家の下郎に此名遺れる故に、つひに卑賤き者と成つれど、もとは此名を負禁れるにぞある。東鑑五十「弘長三年八月九日。御路ナ盛衰記四十「地藏冠者ト云中間」古今著聞集「御

中間になされける」前漢書四十匈奴傳「至懿王曾孫宣王。興師命將以征伐之。詩人美大其功曰。薄伐猶允。至于大原。出車彭々。城彼朔方。是時四夷賓服。稱爲中國」

○中興 山陰道山陽道の國々を中國と云こと古し。類聚三代格に「元慶二年二月三日官符云。伏尋物情。陸奥出羽之在<sup>ニ</sup>絶遠<sup>ニ</sup>五年。因幡出雲之居<sup>ニ</sup>中國<sup>ニ</sup>何得<sup>ニ</sup>六年」

○中酒 食時の中に酒を飲を中酒と云ふ。酒茶論云「又飯後飲謂之中酒」古注云「不醉不醒謂之中酒」

○中酒」とあり。」

○ちゆうをん重恩 後漢書六十三劉虞傳「虞見岐等

厲色叱之曰。今天下崩亂主上蒙塵。吾被重恩。未能

清雪國耻」文選、求自誠表曹子建「今臣蒙國重恩、三

世子今矣」(◎校訂者曰、中元以下六項、チユウノ順序ニ入ルベキノナリシナリ)

○ちりくにまどふ 忠見集十二「春の別を、し

む「はかなくも花のちりく、まどふかな行へもしら

ぬ春におくれて」(◎校訂者曰、此分

○ちうとなる箇聲 今昔物語、廿四「箭ノナウト

鳴テ略、チウト鳴テ外へ返タレバ」

○ちかごと 誓言 後撰集、戀三「よひに女に逢て必後にあはんとちかごとをたてさせて、あし

たに遣はしける」同戀四藤原滋幹「好古朝臣に、さら

にあはじとちかごとをして、又のあしたにつかはし

ける」林葉集五、不用誓言戀「ちかごともうき身は

こりぬわれといへば神をも神と君がおもはぬ」清少納言集「ちかごとをたて、」

やしろの神もさけ君わすれすば我もわすれじ」

○ちかづけ 宇治拾遺二八「地火爐に火おこし

云々」また八に「地火爐をさしつけてこがしたり

などある今ちかつつけといふは、此等の心より出たる

か。

○ちかどなり 近邊にも、またまことの隣にも

いへり。拾遺集雜、秋「ちかどなりなる所にかた、

がへにわたりて、貫之」同「西なるとなりにすみて

かくちかどなりにありけることなど」空穗物語上國譜

「ちかどなりにいまだに御申よらで物し給へど」

○ちがひめ 遠目 新撰六帖六、信實朝臣「か

りてほすよど、まこもあみいとのちがひめおほき我こゝろ哉」

○ちがふ 繢千載集釋教、定家「みなれざを岩

間になみは、ちがへどもたゆますのぼるうちの川ぶ

玉<sup>玉</sup>、ちがひのこといらでんのはながたをするて」

○ちかへやり戸 元良親王集「をんなとちかへ

や、戸のもとにて物のたまひてのち「見し夢はこま

して、専佛シャウに志す。一休尋寄て「き、しよりなくなりてやみにけんちかへやり戸のもとにねしかは」  
見て「さりともの花おもひくまなき桜をしまじ」源氏物語總角「ちかおとりするやうもやなどぞあやふくおもひわたりしを」濱松、四「ちかおとりするぞやとの給ふ」  
○ちから車 今俗云大八車なり。榮花物語疑「ちから車にえもいはぬおほ木どもにつなをつけて、さけびの、しりひきもていき」  
○ちからなき 夫木抄、二、春、大江千里「こづたふにみどりの枝のよわければ鶯とひるちからだになし」

○直綴 園太曆、延久二年四月條に此名見えた  
り。又同四年十五日、公賢大臣のかしらおろし給ふ所にも「脱直衣、次着三法衣。墨染大直綴也。其色濃」

○知行所 知行と領分とは似て異なり。是を一に心得をるは委しからず。そのけぢめは、中古の程は、此間も郡縣にて律令の政事なりし故に、今の如約れるなり。そは變るまじ忘るまじと、互に手と手を握り交していひ約る。今もおのづから此ふり遣れり。されば古事記上卷にも「如此云期云々」又「約意云々」などありて、約束の方に云が本なるを、後には「さきの世の御契りや深かゝりけん」など、宿世の方にも轉用し、又夫婦相交るかたにもいふやうにはなりしなり。

○畜生 世におやこ兄弟などたはくる者を畜生也といふ。外國にても隋文帝が時に、陳夫人といひしに、太子廣がけさうしけるを文帝が聞て、いたく怒りて「畜生何足付大事」といへりしことあり。

○逐電 明月記「貞永二年二月十七日、慈賢。其夜逐電。居住近江國百濟寺。惟長爲御使駆下丁。自年來深厭世事以夏次云々。」

○ちごく 今の世に隠し買女を地獄といへり。闇き所に忍びあふゆゑに云かとおもひしに、より所あり。一休物語云「和泉國大鳥郡堺津北莊高須に住し也。今も遊女町なり。十軒ばかりあり。此遊女つらくおもふに、うき河竹の流の身となる事、前世

を以て一大橋を造り、其余金を以て復一庵を建て、封建築の政事のさまに、國郡を得て我物とする事あたはず。たゞ其所の支配をして、その所の運上貢物をとるのみ。封戸といへるもの皆その事也。これは令國史によりて見合すれば、おのづから明らかなり。されば知行とかも、其所を官よりあづかりて支配するを云て、もとはその政事をしりおこなふより出たる文字也。や、後迄も此わからちは定かなりき。明月記「文暦二年正月十日。難人祝言。左衛門尉俊清殿下勘當子息四人。相共被追却、知行二所他已給其身出家了云々」同「十一月二日。大藏卿書狀播州事口入之處於知行分者。可免由被仰下云々。惟悅之由示之」十訓抄、卷一「後徳大寺左大臣、小侍從と聞えし歌よみにかよひ給ひけり云々。物かはの藏人が所にさてこそ使にはからひつれとて、後には知行所などたびたりけるとなん云々。かの藏人は内裏の六位などへてやさしき藏人といはれけり」

○ちざる 菓を取をもちざるといひ、又餅團子と云物をもちざるといふ。こは手切の轉用に、手して切とるより云なるべし。又夫婦ちざるともいふは心には佛號を唱へて、彌陀の誓を願ふ。此名世にたかく、殊に國色の美艶にして、容は柳の糸のたをやかにして、肌は玉のにはふ如く、遠近爰群ければ、一休和尚もこゝに來り、遊女を見給ひて「聞しよりみておそろしき地獄かな」一休「心の鬼に手引せられて」地獄。一休和尚これを聞給ひ眞に此遊女は三乘四諦の道に通すと禮をなされ給ふとぞ。一休地獄にあり。所傳云、昔一人遊君あり。貌美にして容麗はし、しかも、心ばへやさしく、歌をよくし、常に樂器を習ふ。一日彼に交る者菩薩天女の影向して、歡喜の心極樂世界もかくやらんと、世に佛とぞ號たり。

自惡之罪障の拙さ、其名も恐ありとて、地獄と改名

れに色々の糸をくみて下げるなどしたるを、かざりちまきといふなり。茅縫なるべし」伊勢物語又拾遺集等に見えたるかざりちまきと云は、しゃうぶの根をきざみて、しやうぶのはのわかきをわりて、其中に入て、ゆびほどに色々なる糸にてまきて、時の花のうつくしきなでしこ、あづさる、しもつけ、あふひしやうびの花をもちてかざりたるをいふと、智頭抄にみえたり。

○茶 百服茶、十服茶、回茶、貢茶等の事、ひ部に合せて出。和名抄「茶。爾雅集注云。茶宅加反。亦作株。小樹似<sup>ニ</sup>支子<sup>ニ</sup>其葉可<sup>ニ</sup>煎爲<sup>ハ</sup>飲。今呼<sup>ニ</sup>早採<sup>ニ</sup>爲<sup>ハ</sup>茶。」晚採爲<sup>ハ</sup>茗<sup>音</sup>一名<sup>萬音</sup>嘴<sup>音</sup>風土記云「萬者茗老葉名也。」貝原篤信云「海人藻芥ト云書ニ「茶ハ上古ヨリ我朝ニアリ。挽茶節會トテ、内裏ニオイテ行ハル公事儀式ニシテ、葉上僧正入唐ノ時、重テ茶ノ種ヲ渡サレ、梅尾ノ明惠上人是ヲ観ベリ云々」近江僧海量云「茶ハ上古より皇國にありつと云説、疑ひなし。予諸國を修行しけるに、おもひもよらぬ深山幽谷にも、おのづから生ひたる、何れの國にもあり。就中甲斐國遠山、飛驒國の奥、人家絶て七里十里の、鳥もかよ

はぬ深山に、自然と生たる多くあり。上古よりあらすしていかでかしからん。是炳しき明證也」類聚國史「弘仁六年六月壬寅。令<sup>ニ</sup>畿内竝近江丹波播磨等國殖<sup>ハ</sup>茶。毎年獻<sup>ハ</sup>之」

○長者<sup>ニ</sup>二代なし 景行錄云「世無<sup>ニ</sup>百歲人。枉作<sup>ニ</sup>千年計。兒孫自在<sup>ニ</sup>兒孫福。莫<sup>ハ</sup>把<sup>ニ</sup>兒孫<sup>ニ</sup>作<sup>ハ</sup>馬牛<sup>ト</sup>省心銭要云「爲<sup>ハ</sup>子孫<sup>ニ</sup>作<sup>ハ</sup>富貴計」者。十敗<sup>ニ</sup>其九。爲<sup>ハ</sup>善方便<sup>ニ</sup>者。其後受<sup>ハ</sup>惠」

○張範<sup>ニ</sup>有<sup>ハ</sup>福<sup>ニ</sup>矣 熊坂長範は盜賊の首魁なり。人の家に盜にいる前に、酒肆につけて、他の財寶にあて、聴りのむ。これを張範があてのみと云ならはせり。雜々拾遺云「熊坂太郎は賀州の人也。浪<sup>ハ</sup>して盜賊の魁首となり、髪を薙て張範と號す。承安年中牛若にうたる。此張範七歳の時、父と<sup>ト</sup>もにある福僧の土用ばしするところにゆき、くらのかざをぬすむ。住持見つけて追かけ、とりかへす時、張範鍵を持ながらころびて、鍵をしめりたる土におしい

尾張國<sup>ニ</sup>盜器大椀五合<sup>裡各九寸五分</sup>中椀五台<sup>裡各七寸小椀六寸</sup>茶椀廿口。長門國<sup>ニ</sup>盜器大椀五合<sup>裡同</sup>中椀十口云々小椀十口云々茶椀廿口云々

○ちゃんぎり 銅拍子 とんびやうし

北條九代記一義經の妻白拍子静條に「頼朝卿御臺處鶴岡にまわらせらる云々。重ねて使を遣して、ひとへに大菩薩の奉幣に擬せられんよし、かへすべく召れしかば、力およばずしぶりながら鶴岡に参りて、廻廊に舞臺を構へ、工藤左衛門尉祐經は鼓を打、畠山次郎重忠は銅拍子を仕る」東鑑六<sup>丁</sup>廿<sup>七</sup>「靜女鎌倉にて舞の所、左衛門尉祐經鼓云々。畠山次郎重忠銅拍子云々銅拍子は是にてみれば、かねの類と見ゆ。猿樂にもシヤギリと云もの有。俗に祇園祭などにチャギリと云もの有。それにや。十訓抄に「太鼓<sup>ドン</sup>ビ<sup>ヤウ</sup>シ<sup>カ</sup>」とりいでよとて、舞姫もさぶらひまひかなで、「いでもあやなり」とあるは、このもの也。トウハトンともいふ。うとむとつねに通。考、冠を、かうがへ、かんがへ、かうぶり、かんむりといふがごとし。つめてはトウモド、もいふ、また常の事也。

○忠節 前漢書六十杜延年傳「首發大姦。有忠節

はぬ深山に、自然と生たる多くあり。上古よりあらすしていかでかしからん。是炳しき明證也」類聚國史「弘仁六年六月壬寅。令<sup>ニ</sup>畿内竝近江丹波播磨等國殖<sup>ハ</sup>茶。毎年獻<sup>ハ</sup>之」

れ、かたをつけ置、後に其かたにあはせて、相鍵をこしらへ、庫に入<sup>フ</sup>財寶をぬすみ、それよりおもじろき事におもひ、ひたもの追はぎ強盜せしと云「熊坂張範が事、義經記には見えず。藤澤入道といふ者あり。これにや。但し日本事跡考に張範が事あれば據あるか。

○ちやがま 「なべかま」を見よ。

○嫡々相承 大方便經云「自淨王劫初以來、嫡々相承」

○茶具 北山鈔<sup>佛名</sup>天暦九年十二月廿二日取茶并茶具二器付<sup>三葉枝</sup>

○茶漬 権中納言定頼卿集「うちよりいたまひて、ゆづけのゆまち給ひけるほどに、郭公のなきければ、「ゆづけのゆまつに夜更てをのづから山はとやさすなくをさゝづる」

○ちやのこ 「かけあひ」を見よ。

○茶まが 茶がまと云べきを、茶まがとさかさまにいふも例多かり。真魚貝をなま貝、あらたしをあたらしといふ類の如し。(猶「ちやがま」を參照せよ)

○茶椀 延喜式、卷廿三「民部式云。年料難器

○忠が不忠になる　呂氏春秋云「至忠逆於耳」  
倒於心

○ちよき舟　小舟なり。其形猪牙に似たるゆゑ  
に入り其所を見ルベシ

○ちよくがく　「おいへやう」を見よ。

○ちよばいち　ばくちし　ちよばいちは橋蒲  
打の轉じたる也。いとうと親しき事は、いつくしみ  
とも、うつくしみとも云が如し。打とは博奕の省れ  
るなれば、其同例也。今はくち打といへるは、重言  
なり。徒然艸上、百二十六に「ばくちの負けはまり  
て云々。その時を知をよきばくちしといふ也と或人  
申さ」とあり。和名抄云「兼名苑云。橋蒲一名九采。  
内典云。橋蒲和名加利字知」

○塵　あくた　和名抄云「塵埃。孫恤云。揚土也。陳  
哀二音和名知利」また「糞堆。辨色立成云。阿久太布。  
上附問反。下都回反」とあり。知利は散飛より名と  
なり、阿久太は田畠の糞より名となりて、彌廣生の  
よしなるか。

○塵埃　孫恤云。揚土也。陳哀二音和名知利  
糞堆。辨色立成云。阿久太布。上附問反。下都回反  
とみえたり。糞纏は今世にもいふぢりめんなるべし。  
但し昔はぢりめんといひけむを、ぢりめんとは訛れ  
るかといへり。

○ありをむすぶ　今俗にこゝろばかりにわざと  
云意也。落葉物語三廿四「北の方より女君」「これは女の  
かくまめる物を引出るとぢりをむすぶときこれ  
てはべるは」とあり。

○智惠出では僕あり才能は煩惱の長せるなり  
老子云「大道廢有仁義。智惠出有大僕」

○血を白骨にそゝぎて親族をしる事　東見記下  
「棄子は成人の後父母を恨むべき事なれども、何と  
しても分身の事なれば、後には父母をなつかしう思  
ふものなり。齊の東昏侯の孕る女をば、梁の武帝是  
を妻とす。遺腹生れて其母右の次第をかたる。その  
子東昏侯の死骸を掘出して、血をしばりかけて見る  
に、白骨に血染たり。於是遂に梁武に叛すと云々。尚  
陽軒口話（予が若かりし時、或人此事を聞傳へて、胤  
の疑はしき兒の血と、わが血とあはせてためしたる  
事ありしに、他人の血は頃には和せず。親族の血は

忽に和してひとつになれるを見て、一座の人もあや  
しげたる事ありき。）

○ちんこ　「ちんばう」を見よ。

○珍重　九條殿遺誠「大風疾雨。雷鳴地震。水  
火之變非常之時。早訪親次參朝。隨其所職之官。廻  
消災之慮。在朝也欲珍重矜莊。在私也欲雍容仁愛」  
學山錄六　藤原明遠「俗間書牘有珍重語。此有所本。唐文  
粹戴。裴度寄李翹書末云。問猶希尺牘。珍重。力  
書無餘。又璵朝聘曰。珍重祝人保養自重如珍寶也」  
拾遺集、雜賀、連歌「流俗のいろにはあらず梅の花  
實資卿珍重すべきものとこそみれむねかたの朝臣」  
○珍物　文選、二、西京賦「珊瑚珠碧瑠珉碧  
珍物羅生煥若醍醐」

○ちんばう　しちんば　ちんこ　べ　ば  
　　へのこ　まら　今俗に男の陽を「ち」

の言もて唱へ、女の陰を「べ」の言して云は。本陽  
を「ち」といひ、陰を「べ」といひし故にやあらん。神  
尊」とて、男神を道と申し、女神を邊と申せり。是  
古の時のおのづからの稱と聞ゆ。是よりして老翁

りて、金堂のまへの花のちるをみてよみ侍ける。俊  
成「ぶりにけるむかしをしらばさくる花ちりのする  
をも哀れとはみよ」

○ちりばさす散ハサズ　空穂物語、俊蔭「日本に  
の物なれど、たゞいまのやうにちりばさすあざやか  
にもちひさせ給へりしに」

○ちりばはひ　塵灰　空穂物語、俊蔭「日本には  
八十歳になる父母侍りしを、みすてゝまかりわたりにき。今はちりばひにもなり侍りにけん」

○ちりばふ　字治拾遺四丁「かやうの所には食  
物ちろほうものぞかし云々」是今云ちりばふ也。り  
ろ同音。うはふの音便歟。此物語には、ちりばふを  
ちろばふ、やごとなきを、やごつなきなどの類多か  
り。

○ちりばむ　鏤字をちりばむとよむ。新撰字鏡  
に「刻也。益金乃知利婆女」とあれば古き訓也。

○ちりばふ　曾根好忠集、春「庭のおもになづ  
なの花のちりばへば春まで消えぬ雪かとぞ見る」  
○縊縊　兵範記に、保元三年三月廿二日石清水

祖父、父、伯父など稱するも、男の稱也。又尊とみて、應神紀に麻呂我知といへるも、男にいひて、女にはいはず。文女の名に、百師木伊呂辨<sup>同</sup>八坂振天某邊崇神なども見え、又彼長戸邊、荒河刀辨、丸幡刀辨など申す類、是皆女の稱也。又此辨を米に轉じて、伊斯許理度賣など申すをおもへば、女を賣と云も、もとは陰の名もて唱へつけたことなるべし。さてかの陽は女の乳、幡幕等の鉤<sup>ナガ</sup>にいふと同じ心ばへの言と聞ゆ。是を今俗にちんばうなどいひて、珍寶などかけども、ちばにて幟の乳をちばとも、ちばともいひ、又つばまれる物、ちよつぱりなど言もあるにはせせみれば、則ちほを音便に、しか訛れるもの也又小兒の陽を、しちんほと云は、縮をし、みといふと同じく、縮るか如く段のあるよりいふ名也。又陰をべ、ばと云は、ひしげひらめきて、ほ、またる形よりいふ名也。古言に、「ほと」といへるは含處にて、貌の左右をほ、といふに同じ。是に就て按へば、陽をへのこといふは、本異名にて、陰の莖の意にやあらん。又まらといふは、眞莖の義にて、良は柱、竹刀、幹などの良にて、すべて莖ある物を良

といふこと多し。されば稱言なるべし。  
○珍寶 西漢書九十四匈奴傳下「多齋珍寶至雲中塞下」

## つノ部

○追從 大鏡四「げに賀茂明神などの、うけさせ奉り給へればこそは、二代まで打つゝき榮えさせ賜ふらめ。この事いとをかしうせさせ給へり。世人申き。御帥殿のみぞ、追從ふかき舌狐かな。あなあいけうなと申給ひける」(◎校訂者曰、此項ツヰノ宇順ニ入ルベカリシナリ)

○朔日<sup>ノイタチ</sup> 中原康富記に「嘉吉二年七月一日。參<sup>ニ</sup>伏見殿、又參<sup>ニ</sup>三條殿、皆朔日之禮也」

○ついたて 衡立 空穗物語<sup>藤原君舟</sup>二「おまし所、こゝの幅なるむしろ敷たり。ついたてさうじたて云々」

○ついたてしやうじ 「しやうじ」を見よ。

○通事 周禮秋官「掌邦國之通事而結其交好。」正字通<sup>ニ</sup>或通謂<sup>ニ</sup>之譯「俗謂之通事」

○つかひ妻 今俗にめしつかひと云意なり。竹取物語「御つかひとおはしますべきかくやひめの」同

祖父、父、伯父など稱するも、男の稱也。又尊とて、應神紀に麻呂我知といへるも、男にいひて、女にはいはず。文女の名に、百師木伊呂辨段同八坂振天某邊崇神なども見え、又彼長戸邊、荒河刀辨、刈幡刀辨など申す類、是皆女の稱也。又此辨を米に轉じて、伊斯許理度賣など申すをおもへば、女を賣と云も、もとは陰の名もて唱へつけたことなるべし。さてかの陽は女の乳、幡幕等の鉤にいふと同じ心ばへの言と聞ゆ。是を今俗にちんばうなどいひて、珍寶などかけども、ちばにて幟の乳をちばとも、ちばともいひ、又つばまれる物、ちよつぱりなど言もあるにはせみれば、則ちほを音便に、しか訛れるもの也。又小兒の陽を、しちんほと云は、縮をしとみといふと同じく、縮るか如く段のあるよりいふ名也。又陰を、べ、ぼと云は、ひしげひらめきて、ほ、まりたる形よりいふ名也。古言に、「ほと」といへるは含處にて、貌の左右をほ、といふに同じ。是に就て按へば、陽をへのこといふは、本異名にて、陰の莖の意にやあらん。又まらといふは、眞莖の義にて、良は柱、竹刀、幹などの良にて、すべて莖ある物を良

辨など申す類、是皆女の稱也。又此辨を米に轉じて、伊斯許理度賣など申すをおもへば、女を賣と云も、もとは陰の名もて唱へつけたことなるべし。さてかの陽は女の乳、幡幕等の鉤にいふと同じ心ばへの言と聞ゆ。是を今俗にちんばうなどいひて、珍寶などかけども、ちばにて幟の乳をちばとも、ちばともいひ、又つばまれる物、ちよつぱりなど言もあるにはせみれば、則ちほを音便に、しか訛れるもの也。又小兒の陽を、しちんほと云は、縮をしとみといふと同じく、縮るか如く段のあるよりいふ名也。又陰を、べ、ぼと云は、ひしげひらめきて、ほ、まりたる形よりいふ名也。古言に、「ほと」といへるは含處にて、貌の左右をほ、といふに同じ。是に就て按へば、陽をへのこといふは、本異名にて、陰の莖の意にやあらん。又まらといふは、眞莖の義にて、良は柱、竹刀、幹などの良にて、すべて莖ある物を良

といふこと多し。されば稱言なるべし。  
○珍寶チボウ 西漢書九十四匈奴傳下「多賚珍寶至雲中塞下」

## つノ部

○追從ツキシヨウ 大鏡四「げに賀茂明神などの、うけさせ奉り給へばこそは、二代まで打つき榮えさせ賜ふらめ。この事いとをかしうせさせ給へり。世人申き。御帥殿のみぞ、追從ふかき古狐かな。あなあいけうなと申給ひける」(◎校訂者曰、此項ツヰノ字順ニ入ルベカリシナリ)

○朔日ツイタチ 中原康富記に「嘉吉二年七月一日。參伏見殿又參三條殿皆朔日之禮也」

○ついたてしやうじ 衛立 空穗物語藤原丹二「おまし所、こゝの幅なるむしろ敷たり。ついたてさうじたて云々」

○ついたてしやうじ 「しやうじ」を見よ。

○通事ツヅジ 周禮秋官「掌邦國之通事而結其交好」正字通「或通謂之譯俗謂之通事」

○つかひ妻 今俗にめしつかひと云意なり。竹取物語「御つかひとおはしますべきかくやひめの」同

○つかれ 萬葉集二十六「馬渡爾」

○つかれ 萬葉集二十六「馬渡爾」

○つがひ 藤原爲忠朝臣集「かやくさのしづやの軒にむら立てひろふおちばにはしやつかる」

○つがひ 藤原爲忠朝臣集「かやくさのしづやの軒にむら立てひろふおちばにはしやつかる」

○つかふ 竹取物語「野山にまじりて竹をとつがひ」

○遣し皆 藤原爲忠集「朽木ばしるぐにとまつがひ」

○つかふ用也 竹取物語「野山にまじりて竹をとつがひよろづの事につかひけり」空穂物語藤原の君「そ

の糟をみそ代へつかふもよし」

○つかまつる 空穂物語「みかぐらのめし

ひみまくほしは數なく有ながら人につきなみまとひこそすれ」同、小野小町「人にはむつきのなきにはおもひおきて胸はしり火に心やけをり」後撰集戀六よみ人しらす「世の中におはありあけのつきなくてやみにまとふをとはぬつらしな」拾遺集戀一、貫之「行末はつひにすぎつゝ逢事のとしつきなきぞわびしかりけり」金葉集、戀下、顯仲女「心からつきなき戀をせざりせばあはでやみにはまよはざらまし」

○つぎがみ 繢紙也。源氏物語藤枝「さまくの

づきがみの本ともえりいださせ賜へるついでに云

タ「河海抄梅枝に續紙」

○接木 明月記「寛喜二年三月七日。兩株八重

桜一株段花漸開。永日徒然令分栽菊苗草不憚」と

見えたり。

○月こよひ

月詣集五夏月をよめる、賀茂賀保

月こよひ秋にかはらずおなじくはほどなくあけぬ

山のはもがな

○つき出し 忠見集「廿日ばかりのほどにつき

出して、さとには出むとする人のいひければ云々」

○月のかさ 和名抄、十六夜日記「有明の月さ

へかさきたりといふをきて「旅人のおなじ道にや

いでつらんかさ打きたる有明の月」夫木抄十三「秋

東へ下りけるに、有明の月笠きたるといふ所にて、

安嘉門院四條歌〔十六夜日記〕

○月の顔 「ひのめもみぬ」を見よ。

○つきは 「てまり」を見よ。

○月日のあかり 夫木抄、卅、雜、信實「陰く

らき模のしげ山つれぐ」といつを月日のあかりとも

みす」

形。其留臣而用則爲國有利。何空之奔海島耶。於是聽其辭以不弃。仍令構湊瀬山形及吳橋於

南庭。時人號其人曰路子工亦名芝者摩呂。」

○月夜鳥 夫木抄、廿七、雜、衣笠内大臣「吹

風に霜おきまよふみ山べに月夜がらすの聲もさむけし」

○月を雪にうづむ 鶴長明集「あらち山松のひ

やきぞほのがなる月もや雪にうづもれぬらん」

○つく 馬に物を附、孤の人憑などの類は常

の事也。此外にも敵方に隸、身方に歸なども古くよ

りいふこと也。古事記に「天下人等背輕太子」而

歸穴穗御子」書紀には「群臣不從。悉隸穴穗皇子」とあり。堀河院百首、權中納言匡房「五月雨は

宿につくまのあやめ草軒の雪にかれじとぞおもふ」

相如集「ねぎ事をきかぬ物からちはやぶる神てふ神は君につきにき」

○某づぐ 「かけご」を見よ。

○某づく 金豆久、力豆久など云類の豆久也。

古事記、明宮段に「於是其兄慷慨弟之婚。以不償其字禮豆玖之物」とある、是今世に云賭豆玖なり。

○繼目 藤原基俊家集「若駒よ心してふめ障雪につきめもみえずよとの繼橋」

○月やく 婦人の月水を月やくと云は、月々役の如くに見る故の名也。漢字にては、月水、月經、經水などいへど、此の言にはさだかなる名もきこえず。和名抄に「月水、俗云佐波利」空穂物語〔後漢に月水は何の月より止風雅集紙に「もとよりも塵に交はるしそといへるなり」〕

○何時よりか御けがればやみ賜ひし云々」〔狂たるにて、狂める月數な

神なれば月の障も何か苦しき」これは『和泉式部熊野へ詣たりけるに、障にて奉幣かなはざりけるに「は

れやらぬ身の浮雲の棚引て月のさはりとなるぞ悲しき」とよみて寐たりける夜の夢に、告させ賜ひけり

となん」などあり。又古事記中卷、倭建命段に「意須比ノ禰著三月經」とありて御歌に「都紀多知邇祁理」とあり。此月經、當昔には其詞ありけんを、傳

らざりしそ口をしき。

○築山 推古紀二十年「是歲自三百濟國有化來

者。其面身斑白。若く有白癬者乎。惡其異於人。欲棄海中島。然其人曰。若惡臣之斑皮者。白斑

牛馬不可畜於國中。亦臣有小才。能構山岳之連音にひかれて、清濁の轉するのみ也。

○つく田 作り田のよし也。田舎に此言のこれ

り。古事記上卷に「天照大御神之營田」また「營下田」營高田也。書紀孝德紀「丁」營田など見えたり。

和名抄に「佃豆久太」とあるも同じ。

○つくくぼうし蝶名 つくんし 和名抄云

「陶隱居本草注云。蛬蟬。和名久豆久豆保宇之。七八月鳴者也」とあり。今つくくぼうし、東國にて

つくんしと云は轉せる也。夫木抄九「夏やのつまに

つくくぼうしのなくをきて、俊頼「我宿のつまは

ねよくやおもふ覽うつくしといふむしのなくなる」

此うつくしとよまれたるも是なるべし。

○つくばる 蹲居するをつくばるといふは、う

づくまるの上略なるべし。徒然草〔上四十十九段〕「心戒とい

ひける聖人は、あまりこの世のかりそめなることを

おもひて、しづかにい居ける事だになくて、常は  
うづくまりてのみぞありける」  
○つぐむ 俗に蹲居するをつぐむといふは、地  
屈の略轉歟。又鶴より出たる歟。此鳥身を屈てちり  
まるくせのあるものなれば也。和名抄に「漢語抄云  
鶴鳥豆久見」とあり。但し此鳥のしか蹲をもて名に  
負たるか。其本末は知がたし。

○つくり枝 伊勢物語に「なが月ばかりに、梅  
のつくり枝に、きじをつけて奉る」とて「我たのむ君が  
ためにと折花はときしもわかぬものにぞありける」  
とよみて奉りければ、いとかしこくをかしがり給て  
使にろく給へりけり』夫木抄、第三『右馬頭保昌朝  
臣のもとに、紅葉の枝にきじをつけておくり 祭主  
輔親「春の野のきすの羽風あふけどもねぐらの梅  
はちらすぞありける」返し、藤原保昌朝臣「鶯のね  
ぐらの梅ときくものをとりたがへたるこゝちこそす  
れ」つれぐ草に、花に鳥つけぬといふ説を書いて、  
伊勢物語を引て、作り枝なればつくるかといひたれ  
ど、夫木抄の歌によれば、つけぬといふは、すべて  
誤なるべし。

○つくり花 桜花<sub>世六</sub>「いろ／＼のつくり花をう  
ゑ」金葉集雜下「櫻のつくり花」竹取物語「つくり  
花のえだにつけ」同「箱に入て物の枝につけて」伊  
勢物語「うめのつくり枝にきじをつけて」空穂物語  
吹<sub>上</sub>「ちんの枝につくり花をつけて、嶋に植あつめて  
さやうの物を麻鳥につくりすゑ」同國譜<sub>上</sub>「やへ山吹の  
つくり花につけて有」萬葉集、十「玉章の君がつか  
ひの手折こし此秋はぎはみれどあかぬかも」夫木抄  
十四、信實「たてながら、まがきの菊のつくり花心  
づからいいろとやはみる」

○つくる 曾根好忠集「花のゑめるをみれば誰  
もおかしとみるらめど、人はかしこきかほをつくり  
云々」

○つくりふ 療治 源氏物語<sub>若菜</sub>「かくためら  
ひがたくおばするほど、つくりひたまひてこそはな  
ど」同浮舟「御風よくつくりはせ給へ」空穂物語「藏開  
一日めしありしかば、まわりたりしに、つくりせ  
給ひしは病おもひなりにたるけしなどのやうになん  
づくらせ給ふと申せば」惠慶法師集「山里の人の家  
に菊の花あるじ折てつくりふ「霜雪にあてぬさきよ

り菊の花つくりふ人の袖ぞつゆけき」

○つくる ふみつくゑ おしまつき 机は  
杯居にて、飲食の器を居るより云名也。古事記上卷  
に「百取机代之物」貞觀儀式及臨時祭式の鎮魂祭條  
に「大膳職造酒司供几代物」とありて、其品々  
は大膳式造酒式等に見えたり。和名抄「唐韻云。机  
案属也和名都久惠」と有を本にて又文書具に「書案  
俗云不美都久惠」又坐臥具に「和名於之方都岐」と  
あり。おしまづきは、押坐几の略言也。

○つけまめ 「つく／＼ぱうし」を見よ。

○つけおち 「おち」を見よ。

○つくんし 「おち」を見よ。

○つごもり 伊勢物語に「しはすのつごもりに  
うへのきぬをあらひて」

○辻 つゝやはたち 阪陌をつちと云は、十  
路の義なるべし。十字を都といふ故に、廿をつゝと  
も廿山とかきて、もと廿もはたちも同じ事なるを、

重ねて云也。さて十路の事は、和名抄道路類に「十  
字。吳均行路難云。縱横十字成<sub>二</sub>阪陌。今按十字者  
東西南北相分之道。其中央似<sub>二</sub>十字也。俗用<sub>二</sub>辻字。  
本文未詳とあるにて知べし。空穂物語後<sub>上</sub>「あれか  
人にもあらぬ心ちして辻にたち給へり」同上「三條  
京極のつちにたちたり」

○厨子 左經記「萬壽三年三月廿日云々。安<sub>二</sub>置  
五大力佛殿於其中<sub>二</sub>此佛殿厨子也。時<sub>二</sub>如<sub>二</sub>螺鈿<sub>二</sub>云々」

○つじうち 辻打 空穂物語<sub>君</sub>廿四「御かう  
はじめよとの給へば、牛飼つじあそびす。らうそく  
どもあつまりて、聲をあはせてのゝしれば云々」此  
程辻遊びといふは、今京俗に云辻打のことなるべし。

○つじきみ 「よたか」を見よ。

○つだみ 兒の乳をもどすを、今もつだみとい  
へり。和名抄四「病類。病源論云。呪吐<sub>上音見</sub>豆太美<sub>小兒</sub>由<sub>二</sub>哺乳冷熱不調所致也」とあり。今按に、乳吐  
の義なるべし。

○つちくれ 「かはらや」を見よ。

○地下 空穂物語<sub>君</sub>廿六「よそめよき女をば、雲の  
上、地のしたをもとめてもけさうし、わらふ人をば

○づ、 源氏物語繪合「一帖づ」

○無恙 繢日本紀宣命に「さきくつゝむ事な

く」萬葉集五十三「つゝみなくさきくいまして」同六

三十一「莫管見」此外十三丁、十五丁、廿五丁、又六十等

六丁「莫管見」此言より出で、恙字は後にあて

世のつゝがなくも、此言より出で、恙字は後にあて

たる也。大殿祭祝詞に「いつゝしきことなく」とあ

るもや、相似たり。空穂物語藏開「大將いさゝかのあ

し手のつゝがもあらば、あそんのするとおもはん」

新六帖二、「衣笠内大臣」「いはつばにたゝふばかりの

山のゐのつゝがなくとも世をすぐさばや」

○つゝき破る 萬葉集十六二十「机」之島能小螺

乎伊拾 持來而石以都追伎破夫利

○つゝ木つゝき 木たゝき 物をしば

く、突刺する事をつゝくといふも、古き言と聞ゆ。

和名抄に「爾雅集注云。劉木一名鶴。和名天良豆々

木。好食樹中蟲者也」とあり。これ皆してつゝぐ

故の名也。さて寺つゝきと云に附て、守屋大連の靈

魂也といひ傳へたるもののかし。神社の樹をば除て、殊

に寺の樹をつゝくと云はまこと歟。是を東國にては木たゝきといふ。

○つゝしる 新撰字鏡に「醋左加奈豆々志留」

○つゝまる ちゝむ しゝむ 林葉集五

「たのめおきしその日を延ぶるたびごとにいかにつゝまる命なるらん」

○つゝみこむる 藤原元真集「いひそめぬほど

ばかりこそ池水の深き心もつゝみこめつれ」

○堤むかひ 夫木抄、廿四、雜、中原師光「はなちてやとほりのかはの朝ばらけつゝみむかひに船よぶや誰」

○つゝやはたち 河内國のつゝ山を、古く二十

山と書りといへり。太平記千磐城の下にも、二十山

とかきたり。(猶「つじ」を參照せよ。)

○萬籠 後世に萬籠、挿箱など並べ云籠あり。

もとは葛籠といひけん故、字は其まにて、口語に

省き來しなるべし。葛蔓もて編造るより云名なり。

都豆良は延喜式などに、黒葛と書り。和名抄、葛類

に、馬鞭草和名久末豆々良とあるは別に一種なるべし。萬葉集十四丁に「波麻都豆良」又十六丁に「安蘇夜

都豆良は延喜式などに、黒葛と書り。和名抄、葛類

に、馬鞭草和名久末豆々良とあるは別に一種なるべし。萬葉集十四丁に「波麻都豆良」又十六丁に「安蘇夜

麻都豆良」古今集戀四に「梓弓引野のつゝら」空穗

物語俊陰卷に「青つゝらを大なる籠にくみて云々」

拾遺集物名に「野をみれば春めきにけり青つゝら籠に

やくましまし若菜つむべくなどありて、中古までも籠

類は多く葛蔓もて作れり。即籠加多美加多末とも加都麻

と云も葛編の約れる言也。本居氏の加多麻の釋に堅

く結て編故に堅編なりといへるはたがへり。さて籠

葛籠の類も後には多く竹して作る事となりければ、

和名抄にも竹器の部に出せり。惠慶法師集「或人の

もとに青つゝらをこにくみて、棗くりなど、花にま

せてやるて「くりかへし籠のうちに花づめばいと

まかりにもありとやはおもふ」かへし「わざとこそく

りはなつめれまがり木にはひまつはる、青つゝらか

な」

○つゝれ 古今集禡旅、素性法師「たむけには

つゝりの袖もさるべきにもみぢにあける神やかへさん

○傳言 言傳 天智紀童謡「なにのつてどと

たゞにしえけん」萬葉集十二二十「何傳言直將吉」

同十九二十「傳言に吾に告らく」又言傳とよみたるは

波。劍鼻也。」

堀河院百首、藤原基俊「春の野のつ

ばながもとのつば董しめさすばかりなりにけるか

な」同春宮大夫公實「むかしみし妹かきねはあれにけりつばなまじりのすみれのみして」

○つはもの うつはもの つはものを強者と心得たるはひが事也。軍士武士をいふは兵器の方よ

うり轉れるなり。兵は和名抄に「兵庫寮豆波毛乃々久良乃官」とあれば都波毛能と云て、刀鉾の屬の總名なり。書紀に、鉾刃、兵器、兵仗、兵革など皆然訓り。但し漢國にては、兵字を械也とも、器也とも注して、即て其兵を執人を多く兵と云る、其をも誤て都波毛能と訓るから、後世には只勇士の稱の如く混て剛者之意と心得て、刀鉾の屬の名なる事をばしらずなりし也。皇國にては、古へ其人を指て、都波毛能と云ることは無りき。書紀などに人を云る兵字又卒字などを、稀に然訓るは、後世の點にて誤なり。古への點には、イクサヒトなど訓りき。さて、つはものと云言の意は、鐸物なり(鐸都美波)。匠具、農具、其餘も諸器に刀鉾屬の物は多かる中に、兵器に局りて鐸ある故に此名を負るなり。鐸を今都波と云は略語也。又器をうつはるものといふは、古事紀傳に「空埴物の義なるを、爾を省けるは土師を波自と云と同じこと也。物を實む料に、内を空に造れる故に然云り。さて後には、必しも土物ならねど、凡ての名にもなれるなり」といへり。今按に、これもあしからねども、たゞに空物とみんも又かやすし。壺、つば前裁

○つぱり　和名抄云「擇食。辨色立成云。擇食。  
和名豆波利」字鏡「牒豆波利乃登草」花山三十互筍花物語  
「御つぱりとてものもきこしめさやりけるに」金葉集雜上「たゞならぬ人の、もてかくして有けるに、  
子うみてけるがもとより、うみたる梅おこせたりけ  
ればよめる、よみ人しらず「葉かくれにつはるとみ  
えしほどもなくこはうみ梅になりにけるかな」夫木  
抄十五、秋、俊賴朝臣「つぱりせしふたごの山の桟  
原よにうみすきて消ぬべきかな」徒然草「下よりき  
ざし、つぱるにたへすして」谷川氏云「衝張の意也。  
梅に云は瀆張の意」

○つひえ　空穗物語藤原の君廿七「人なくてとし比  
はへつれ、いかなるつひえあるをしりて」同廿八「く  
ちをしう物のつひえある事をかぞふれば、多くのそ  
つふ／＼鳴音より出たる詞也。そのよしは四言のづ  
んなり」

○づぶ　物のひたぶるなる事をづぶといひて、  
づぶに賣ぬ、づぶに損したと言ことあり。こはづぶ  
濡と云方より移れるにて、もとは水に物を入れる時、  
づぶ／＼鳴音より出たる詞也。

○つぶさ委 人丸集「とめゆかんつぶさに跡は  
みえずとも鹿のはかりはしるといふなり」空穂物語  
としがけ「えつぶさにきこえず」  
○づぶだつ 「つぶ／＼いふ」を見よ。  
○つぶ／＼ つむ／＼ 堀川院百首「相坂の關  
路にけふや秋の田の穂坂のこまをつむ／＼とひく」  
○つぶ／＼いふ づぶだつ づぶねれた づ  
ぶりと落た 古事記上巻、媛田毘古神段に「其  
海水之都夫多都時名謂三都夫多都御魂云々」實方  
集に「物をだに岩間の水のつぶつぶといはゞや行む  
思ふ心の」千五百番歌合、顯昭判詞に「世俗の口す  
さみの歌に「雨ふれば軒の玉水つぶ／＼といはゞや  
物を心ゆくまで」萬葉十八丁に「可治能於登乃都波  
良都婆良爾」これも櫓の水に觸て鳴音にて、都婆は  
都夫に同じ。これらに合せて今俗にいふ所をも考へ  
合すべし。

○つぶく／＼となく、落窓物語一之下「女いらへ  
もせてつぶく／＼と泣たまひぬ」  
○つぶて　たぶて　飛碟なり。古くはたぶて  
といへり。即飛打の約り言也。今つぶてといふは此  
轉じたる也。萬葉集八三左多夫手二毛投越都倍伎天  
漢敵太而禮婆可母安麻多須辨奈吉<sup>\*</sup> 明月記、天福二  
年七月七日「川崎惣社雜人飛碟之間。雜人狂者中矢。  
漸合死者六人云々」北條九代記十「未尅のころより  
して向ひ飛碟を打けるほどに云々」  
○つぶねれ　かの圓江、圓山、圓石などによれ  
ば、圓でねれたるよしかともおもへど、是は水中に  
物を沒る時、水のづぶりと鳴音を移して云詞ならん  
萬葉集二十四丁「ほり江之伊豆手の船の可治都夫米お  
としはたちぬ水尾はやみかも」又十八十二「かちのお  
との都波良都波良爾」などよみたる、此等楫の水に  
觸て、つぶら／＼と鳴よしのつけ也。鳩とりのか  
いつぶりといふも、つぶりと搔入よしの呼名なるべ  
し。(猶「つぶく／＼いふ」を參照せよ。)  
○つぶね　おほつぶね　大和物語上「本院の  
北方の御おとうとのわらは名をおほつぶねといふ、

いまとかりけり云々」今思ふに、作者に大づぶねといふ有。和名抄に「奴僕和名豆布禪」と記せるを合するに、わざと賤き者の名をとれるなるべし。いにしへの童名にいぬ、いぬき、こまなどいふも多く、又犬かひ、牛かひ、馬かひなど云類も多く、又久曾阿古久曾、某古曾などいふもこれかれみゆれば、もしそのかみ、賤くきたなき方によれる名をおぼすれば、其子よくひとゝなるといふ云ならはしやありてなりけん。大鏡第三「太政大臣實頼おとゞの御わらは名をば、牛かひと申き。さればその御ざうは牛飼をばうしつきとの給ふ也」とあり。かくて局と云ことの意は、榮花物語に、屏風を引つばねてとも、つばやかにつばねてもいへれば、廣き所をちまくとかこひわけたる意也。されば奴僕をつぶねといふも今世の部屋者のよしなるべし。

○つぶりと落ちた  
○壺局 御局 梅壺、桐壺、梨壺等の壺  
は、壺にはあらず、壺也と云人多し。いかにも都煩  
は壺音古、壺は苦本反にて、其字形相似て、其意異  
なり。其事は既く篠崎惟章と云人の、壺碑考と云物

とはいふべかりけれ」古本今昔物語十九廿四身貧シ  
タチ、壺屋住」今昔物語十九十九此壺屋ニ入テ、壁  
ヨリ傷ケト澆テイヘバ、云ニ隨テ這入テ、戸ヲ閉テ  
壁ノ穴ヨリ臨ケバ」同上「僧來リテ壺屋ヲ開ケレバ」同廿四  
「後ノ壺屋ナドニ候ニヤト」東鑑、六「被栽北  
面之壺」鎌倉御所ノ御局様など云は、其局に在をもての稱也。さて局は今云部屋の事にて、長屋を幾つに  
も分ちたるを云。菜花物語若枝巻に「はかなく屏風  
几帳ばかりをひきづばねて、ひまもなくゐたり」と  
あり。此ひきづばねといふ詞もてさとるべし。（猪

〇つば貝名 つば汁  
今つまと云。和名少々

甲贏子、田中螺、ともに  
贏子。豆比。田中螺。和

「つばさ」。『太都比』とあり。田なるをば今はなべて田辛螺といへど、田舎にて煮たる汁を都煩汁といへり。

○つばみ　　舍にて、古しへはふ、むとのみいひし也。後世にはつばむといへり新古今集などにみえたり。萬代集春上、俊頼「白妙の花のつばみをめにかけていそちのみねをおりぞわづらふ」月詣集、圓

位法師「かくはかりつぼむと花をおもふよそよ  
し風のものになるらん一夫木妙、仲政」いたづらにつ

位法師「かくばかりつばむと花をおもふよとぞよぎし風のものになるらん」夫木抄、仲政「いたづらにつけめの花に身をなして心もとなく人にまたれん」○つばめ　　ちまやかにする事を引つばめるなどいふことあり。古くはつばねといへり。俗にすばめるは雀也。蜻蛉日記上「これかれぞ殿上などしつゝあめるなかに、われのみをまざるゝことなくて、夜は念佛の聲さゝはじむるより、やがてなきのみあかさる」又此意を俗にはすばめるともいふ。そは雀より出て、引つばめるかたとは別也。

○つまおと 爪音 順政集「このはちる山路  
の石はみえねども猶あらはるゝ駒のつま音」  
○つまくち 衣の表口也。つくば問答等「みす

○つまおと 爪音 順政集「このはちる山路  
の石はみえねども猶あらはるゝ駒のつま音」  
○つまくち 衣の襟口也。つくば問答序「みす  
のうちよりくれなるのはかま、衣のつまくちおしい  
だして」

○つまり　はしよる　京あたりの人　本の  
　　それをつまげるといへるは、つみあぐるの略きなゆ。  
　　萬葉集廿の巻長歌に「御裳のすそ、つみあげかきなど  
　　云々」とよみたり。江戸にては、はしよるといふ。  
　　端折の謂ならん。

○つますり 堀川百首左京大夫顯仲「東路やいかほの沼の杜若袖のつますり色ことにみん」

○つまづく 新撰字鏡下に「蹠距不<sub>レ</sub>安之貌。脚弱也。豆万豆久」また「蹴然蹴躰也。太知豆万豆久」また「蹠峙留足也。猶豫之貌。太知豆万豆久」

萬葉集三四「馬曾爪突」金葉集戀下「よみ人しらずだし也けれ」拾遺集雜戀「みかりする駒のつまづく青つゝら君こそわれははだしなりけれ」

○つま戸 曾根好忠集、春「しらましや明にけりとも春のよのねやの妻戸に朝日さゝずは」夫木抄舟一難、信實朝臣「あひみての後のつらさの中つまどをりともあけのおとしたてかな」

○つまびき 爪彈なり。源氏物語紅梅「つまびきにいとよくあはせて、たゞこしかきならし給ふ」

○つまもと 爪元 空穂物語春日「つまるとよりちをさしあやして」

○つむぎ 宇治拾遺二十一「つむぎのきぬをぬきてとらすれば」

○つむじ 和名抄云「廻毛」爾雅註云「廻毛」

一云旋毛。和名都無之

○つむじ風 つむじ毛 和名抄云「文選詩云

回旋卷高樹。兼名苑云。颶暴風從下而上也。音號。和名豆無之加世」とあり。之と云が風名なれば、たゞ都武之とのみもいへり。萬葉二三十「冬乃林爾。飄可毛伊卷渡等。念麻低」とよめり。頭の都牟之も、毛の周旋るを云にて、おなじ心の名也。

○つむじげ 「つむじかせ」を見よ。

○つむく 「つぶく」を見よ。

○つむり 頭也。人の頭をつぶりと云は、まろき謂也。古事記に「都夫良意富美」とあるを、書紀には「圓大臣」とかけり。又萬葉集圓江倭姫命世記に「圓山」又「圓石」とあり。

○つめくふ 「はづるさまをいふ也。源氏物語帝木人わろく爪くはるれど」同竹川「あまえて、爪くふべきことにもあらぬをとおもひて」

○つめたき 落窓物語一之上「ひとへもなくていとつめたければ、ひとへを脱過しておき出たまふ云々」

○つめにあむしむ 爪に藍染也。いみじき手わくおばえて」

○つら つらがまへ ほ、 和名抄云「頬。野王按云。頬音和名豆良。一云保々面旁目下也。玉篇云。輔車」

○つらかぶし 「かぶく」を見よ。

○つらがまへ 萬葉集一二「つらく、椿つらく、に見つ、おもふな」同廿五丁「八峯の椿、つらくに、見ともあかめや」

○つらぐる 竹取物語「ものもいはず、つらづ

ざに、衣染るを云。拾玉集、四、賀茂法樂百首雜「それもいさ爪に藍しむことはのしるしとおこたすき姿に」

○つめる 指にて引つむことにて、俗につめるといふ言にもいへり。古今集、誹諧「春霞棚引のべの若菜にもなりみてしがな人もつむやと」とよめるは也。此歌の意はもし思ふ人の我を引つむや、野べの若なになりてつまれてみたき物也。若菜はたれにてもつむ物なればと云也。さて人をつめるはけさうじ戯る、そりのわざなれば、そを若菜を摘に兼ていへる也。物語文なども常多くいふ詞也。古今集、誹諧歌「秋くればのべにたはる、をみなへしいづれの人かつまで見るべき」

○つゆ 裝束の類に露と云るものあり。太刀の頭に、金銀などのおもりをさげ、これを露と云は誤也。

これは墜なり。唐人の詞に、扇に紐を付て腰にさぐる時、墜をつくると云。これ日本のがつけのやうにして付るなり。これを扇子の墜と云。又笛墜と云時は、笛の中に水氣たまりたる拭ふ爲に、ふくさ綱をあちこちへ通して、中拭ふものなり。おもに丸

○つらく 萬葉集三四「つらく、椿つらく、に見つ、おもふな」同廿五丁「八峯の椿、つらくに、見ともあかめや」

○つらぐる 新撰字鏡云「曉、熟視也。豆良々々彌留」

○つらづる 竹取物語「ものもいはず、つらづ

あつきて、いみじくなげかしげにおもひたり」古今集説、大輔「なげきる山としたかくなりぬれば、くら杖のみをまづつかれる」新六帖二、信實「をのえはさぞくちにけん身のうさのわがつらづゑのたゆるともなき」夫木抄卅六難、貫之「ことしげきこゝろよりさへ物おもひの花のえだをばつら杖にして」落葉物語一之上、「たもひ佗て、頬杖をつきて、しばし倚るたまへり云々」源氏物語癸「つらづゑつき給へる御さま云々」つらづゑは支願にて、今いふは、づゑなり。

○つらの皮の厚い あつかましい 頬を覆ひて貌をぬくひて 今の世に、しひてわりなく物する人を、頬の皮の厚いやつじやなど云ことあり。尙書「顔厚有忸怩」文選閑居賦潘安仁「雖吾顏之云厚。猶内愧於寡遠」又強顔といふも是也。またあつかましいと云は、此つらの皮を省きていふなり。又顔をおほひてとも、ぬぐひてと云も、其皮の厚かましきを、おほひぬぐひてものするよし也。詩云「巧言如簧。顔之厚矣」會元云「憲陵説話。面皮厚多少」碧巖云「面皮厚三寸」

○つらの皮をむく これもそのあつかましきをむき剥て恥かしむるよし也。史記八十六刺客傳荊政傳「荊政大呼。所擊殺者數十人。因自皮面決眼。面皮欲争三人不識」これらは、和漢のおのづからにして、相あへるなり。

○つりざを 夫木抄卅五後鳥羽院「おもふかたのいせをの海人の釣棹のながきよあかすぬる、袖かなにして、相あへるなり。

○つるなき弓に羽ぬけ鳥 淮南子云「鳥號之弓。鶴子之弩。不能無弦而射」又云「飛鳥無翼」○つるはぎ 鶴脰也。空穂物語らび「きんひきたまひて、はだしつるはぎにてはしらせたまひて、殿までわらはせ奉り給ふ」金葉集連歌「宇治へまかりける道にて、日頃雨のふりければ水の出て、賀茂河を男のはかまをぬぎて手にさゝげて渡るをみて頬綱朝臣「かも河をつるはぎにても渡るかな」信綱「かれはかまをばをしとおもひて」新猿樂記「或塞レ袴猿踵。或被レ袴鶴脰」又雲「袴猿踵の誤か。今俗、さるも引あり。ではくものなれば、引と云か。鶴脰は、すそたかくか、

げたるを云。鶴の足ながくあゆむさまになぞらへるなるべし。

○鶴は千年龜は萬年 淮南子云「鶴千歳極其游」廣五行記補云「龜齡經萬歲」又云「萬年謂靈龜也」

○つるむ 鳥獸の交接するをつるむといふ。中昔の比は人の上にもいへりしるべし。宇治拾遺物語卷一十六「是も今はむかし、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。佛事をせられけるに、佛前にて僧に鐘をうたせて、一生不犯なるをえらびて講を行なはれけるに、ある僧の禮盤にのぼりて、すこしかほけしきたがひたるやうに成て、鐘木をとりてぶりまはしてうちもやらで、しばしばかりありければ、大納言いかにと思はれけるほどに、やゝ久しく物ものはでありければ、人どもおはつかなく思けるほどに、この僧わなゝきたるころにて、かはつるみはいかゞ候べきといひたるに、諸人おとがひををはなちてわらひたるに、一人の侍ありて、かはつるみはいくつばかりにてさぶらひしと問たるに、この僧くびをひねりて、きとよぐもしてさぶらひきといふに、

大かたとよみあへり。そのまぎれにはやうにけりとぞ」とあり。今案に、此皮つるみとは、手して男茎の皮をすりもみして、精汁を洩すを云也。太秦牛祭祭文にも「鐘樓法華堂乃加波津留美」とみゆ。又神遺方上卷に「由免津留美」と云ふとも聞ゆ。是は夢に精液を漏すなり。和名抄に「尚書云。鳥獸卒尾」云々。交接曰「尾」鳥交接俗日本紀十六六遊

牝

○つるめそ 弦賣人 弦刺 犬神人 安永京名所志云「東山六波羅の愛宕寺或云珍皇寺に、清水坂の弦刺ども、正月二日此寺に集りて、大鼓を打て酒宴を催す。此日、今年の祇園會の事云定む。常に弦賣あるきて賤き者なれども、祇園社の使れ者にて、祭の時は神輿を昇、或は甲冑を着て太刀を引き、供奉し警衛をなせり。これをつるめそといへるは、弦召々々と云が名となれるなるべし。犬神人とかくは、四國にありといふ。梓座子の名より云歟。これも其類なればなり。

○雙の立き 音櫻嚴經疏云「猶如雙人通三百歩外臨於蚊蚋」

## 手ノ部

○手 古事記傳「明の宮殿、大御歌條云「宇斯呂傳波は後方者なり。傳は都間の約りたるにて、都は之に通ふ辭、問は方なり。游母豆の豆も同じ。游母豆は面方なり。前は目方、後は尻方にて、これらも都と云ざるのみの差にて、問は同じ。此外俗言にも山の方を山豆、海の方を海豆など云類多きも、豆は都方にて、同言なり。又道之長手、繩手などの手は、道の意にして、異なり。思混ふべからず」とあら。今按に、俗に繩手と云も、長手の訛りにて、其長手は長道の轉也。そを道之長道と重ね云は、詞の文にて、道之長乳齒神と申す御名の類也。又江戸にて西方の街を山之手と之を添云は、直に山之面と心得てよし。裏表の時は差めあれども、他物に亘りては廣く云詞也。

○手 漢書、郊祀志「天子識其手」注師古云「手謂所書手跡」空穗物語「たゞそのかきて奉られたる本をこそ、男手も女手もならひ給ひけれ」源氏物語梅枝「女手を心にいれてならひしさかりにこともな

き手本おほくつどへたりし中に云々」王充論衡十二七丁程材篇「文吏幼則筆墨手習云々」大鏡三「これにぞ日本一の御手のおばえは、此後こそとり給へりしか佐理夢ニ神ノ告ナカケテ類カク 同書三「經任君の母上、大貳におとす女手かきにておはす云々」源氏物語梅枝「さうのものたゞのもの女てをいみじうかきつくし給ふ」同書「おほどかなる女手のうるはしう」同書「みだれたるさうの歌を筆にまかせてみだれかきたまへるさま」○手「すまひの事也。空穗物語後墜「すまひはて、いつ手六手ばかりとりて、最手いできてぬの引などするに」

○某手 手がある 手がたらぬ 造手、繩手、纏手、成手、云手、聞手、見手、染手などの類は、其人を云なり。又其事を爲に、手がある、手が不足などもいへり。是も其爲人を指る也。此等の豆は人の登を通はし云にやあらん。これも古き時より云ことなり。内藏寮式に「雜作手造御櫛、手二人。夾纏手二人。脇纏手二人。暈纏手二人。造袖絶手二人」れど此歌出所さだかならず。おぼつかなし。朝野群載、卷四、應德二年十月卅日。法定院佛聖供燈油料一狀云「右法定院建立之後。申寄公家。早爲鎮護國家之砌。安置佛像。之前無三挑灯柱云々」此挑灯は若は灯爐にて、今の挑灯には有べからずともおもへど、此名の物に見えたる初とはすべし。又佛前などといへる人、三井寺の梅若といへる兒を懸、同寺のははやくその比より有けんも知べからず。秋夜物語に、後堀河院の御宇の御歌に、西山のけいかい律師といへる人、三井寺の梅若といへる兒を懸、同寺のある坊にかくれたるに、此兒其坊へ忍びゆく事を書る條に「ふけ行鐘のつくと、月の西にめぐるまで、待かねたる所に、韓垣の戸を人の明るおとするに、書院の杉障子より遙かに見いだしたるに、れいの童先にたちて、魚腦のちやうちんに螢を入れてとしたり。其光かすかなるに、此ちをきんしやのすいかんなよやかに云々」又後花園院の永草九年行幸記四十に「御會所の西の馬道の軒に、ぎよなうの挑灯

如く、其物を造るよしの名なれども、又如此某手と續け云時は、おのづから某人と云が如く聞えゆく事大かた言語の常なり。

○手足駄 今昔物語廿、「長高キ童ノ瘦タルガ、

駄キ布衣一ヲ着テ、手足駄ヲ履乍ラ、被貫テ未死モ不畢テ動ク」平足駄ノ體力。

○提起 困知記云「操舍之爲言猶俗云提起放下」今俗にてつきといふは、提起なり。はつきといふは發起なり。くつきといふは倨起なり。

○庭訓 明月記「寛喜三年三月三日云々。昔聞

庭訓即如此事歟」同「天福二年八月十四日云々。四金計會水性者可憐忍」由昔受庭訓八卦當年星皆以重厄也。

○泥中の蓮 傳燈錄云「鳩摩羅什。姚王以妓女逼令受之。乃自講說。譬如臭泥中生蓮花。取蓮花勿取臭泥」

○懲惡勸善 茅曰。朝三暮四のいとなみ

左傳云「春秋之稱懲惡而勸善」衆狙皆怒。曰然則朝四而暮三。衆狙皆悅」

き手本おほくつどへたりし中に云々」王充論衡十二七丁程材篇「文吏幼則筆墨手習云々」大鏡三「これにぞ日本一の御手のおばえは、此後こそとり給へりしか佐理夢ニ神ノ告ナカケテ類カク 同書三「經任君の母上、大貳におとす女手かきにておはす云々」源氏物語梅枝「さうのものたゞのもの女てをいみじうかきつくし給ふ」同書「おほどかなる女手のうるはしう」同書「みだれたるさうの歌を筆にまかせてみだれかきたまへるさま」○手「すまひの事也。空穗物語後墜「すまひはて、いつ手六手ばかりとりて、最手いできてぬの引などするに」

○某手 手がある 手がたらぬ 造手、繩手、纏手、成手、云手、聞手、見手、染手などの類は、其人を云なり。又其事を爲に、手がある、手が不足などもいへり。是も其爲人を指る也。此等の豆は人の登を通はし云にやあらん。これも古き時より云ことなり。内藏寮式に「雜作手造御櫛、手二人。夾纏手二人。脇纏手二人。暈纏手二人。造袖絶手二人」れど此歌出所さだかならず。おぼつかなし。朝野群載、卷四、應德二年十月卅日。法定院佛聖供燈油料一狀云「右法定院建立之後。申寄公家。早爲鎮護國家之砌。安置佛像。之前無三挑灯柱云々」此挑灯は若は灯爐にて、今の挑灯には有べからずともおもへど、此名の物に見えたる初とはすべし。又佛前などといへる人、三井寺の梅若といへる兒を懸、同寺のははやくその比より有けんも知べからず。秋夜物語に、後堀河院の御宇の御歌に、西山のけいかい律師といへる人、三井寺の梅若といへる兒を懸、同寺のある坊にかくれたるに、此兒其坊へ忍びゆく事を書る條に「ふけ行鐘のつくと、月の西にめぐるまで、待かねたる所に、韓垣の戸を人の明るおとするに、書院の杉障子より遙かに見いだしたるに、れいの童先にたちて、魚腦のちやうちんに螢を入れてとしたり。其光かすかなるに、此ちをきんしやのすいかんなよやかに云々」又後花園院の永草九年行幸記四十に「御會所の西の馬道の軒に、ぎよなうの挑灯

手をうちてあがおもとにこそおはしましけれ  
○手打 かしは手 今の俗に手打ことを、柏  
手と思えたるは、拍<sup>オホ</sup>手の拍を、柏と見紛て云如くな  
れど、猶こは膳部が打手より出たるなるべし。かし  
は手を打ともつゞけいへり。猶此事は下に云べし。  
古く物に就て手打し事は、顯宗紀室壽御詞に「手掌  
権<sup>チヨウ</sup>亮<sup>リヤウ</sup>拍<sup>オホ</sup>上<sup>アゲ</sup>賜<sup>タマハシ</sup>吾常世等<sup>タマシテタタク</sup>」持統紀に「皇后即天皇位。  
公卿百寮羅列匝拜而<sup>アラタニ</sup>。拍<sup>オホ</sup>手焉<sup>ハシマツ</sup>」續紀廿八に「云々。  
是日縉岱進退無<sup>レ</sup>循<sup>ル</sup>法門之趣<sup>ヲ</sup>。拍<sup>オホ</sup>手歡喜<sup>スルコト</sup>」一同<sup>ニ</sup>  
俗人<sup>ニ</sup>三代實錄卅六に「大極殿成。右大臣設<sup>シ</sup>宴於  
朝堂院含章堂。賀<sup>ハシマツ</sup>落也云々。<sup>飛驒工等二十許人。</sup>不<sup>レ</sup>任<sup>ニ</sup>感悅<sup>。</sup>起<sup>レ</sup>座<sup>。</sup>拍<sup>オホ</sup>手歌舞。合<sup>シ</sup>座<sup>。</sup>大爲<sup>ハ</sup>唉樂<sup>。</sup>」貞  
觀儀式蹠祚大嘗會儀に卯日<sup>ノ</sup>國柄奏<sup>ニ</sup>古風<sup>ニ</sup>五成<sup>。</sup>悠紀  
國奏<sup>ニ</sup>國風<sup>ニ</sup>四成<sup>。</sup>次語部奏<sup>ニ</sup>古詞<sup>。</sup>次隼人司率<sup>ニ</sup>隼人<sup>。</sup>  
云々。奉<sup>ニ</sup>風俗歌舞。皇太子以下五位以上就<sup>ニ</sup>庭中版<sup>ニ</sup>  
跪拍<sup>。</sup>手四度<sup>ノ</sup>度別八遍<sup>。</sup>神語所謂<sup>。</sup>六位以下亦如<sup>レ</sup>此<sup>。</sup>又春  
日祭儀に「云々。屬趨入就<sup>ニ</sup>版中云。御飯賜了。神祇官  
祭儀に「云々。屬趨入就<sup>ニ</sup>版中云。御飯賜了。神祇官  
拍<sup>。</sup>手三段<sup>。</sup>八開手<sup>。</sup>酒盃三行了。拍<sup>。</sup>手一段<sup>。</sup>鎮魂祭儀に「云  
々。大膳進屬以下共起賜<sup>ニ</sup>神祇官。次大臣以下訖大膳

「あまたかけらる云々」などあり。此等にきよなうと  
云事は、いかなるものなりけん。さだかならねど、  
いさゝか思ひ合する事あり。江戸鹽町伊勢屋權十郎  
といふが家に、父の代に長崎より持來つる魚脳燈と  
云物二つもたり。魚の脳皮を引延て張たる挑灯也。  
今之挑灯の如く、屈伸はならざれど、厚き油紙を張  
れるさまで、中にともせる火の光よくすきてひか  
れり。もし此類のものなりけらし。かの兒の蟹を入れ  
たるに、其光かすかなりといへるによくかなひたれ  
ば也。但し全くの脳皮ならば、佛前の燈には用ふま  
じ。おもふにそのかみ魚脳といひしは、紙に膠を引  
たるをしかいふにや。かの秋夜物語には、玄惠法印  
の作といへれば久しき事にして、即其後堀河院の御  
卽位より後花園院の永享九年までは、二百餘年也。  
今此文政元年までには六百餘年になれり。かゝれ  
ば佛殿などに用ひし、右をはじめとすべき也かし。  
猶又諸書を参考せしに、庭訓往來には此名みえず。  
下學集には見ゆ。七十一番職人歌合になし。鎌倉年  
中何事にもなし。尺素往來にもなし。饅頭屋節用に  
みゆ。長祿年中の古記にみゆ。穴太記にも見ゆ。北

條五代記にもみゆ。好古目錄に、箱灯燈見ゆ。吾吟  
我集に見ゆ。むさしあふみに見ゆ。訓蒙圖彙にもみ  
ゆ。水鳥記にも見えたり。此等の書に載せたるは、  
皆夜行に用る今之燈燈なり。燼囊鈔卷三「灯呂をア  
ンドン、チャウチソなど云。文字如何。答挑灯と  
書てチャウチソとよみ、行灯アンドンとよむ。皆唐  
韻歟。行の字をアンとよむ事、行在、行者等也云々」  
此書を作れる文安の比は、灯呂をさしてあんとんと  
もちやうちんともいへるを知べし。唐話纂要卷五「挑  
燈ツリドウとあれば、ちやうちは、もと灯爐をさし  
ていへる唐音の、こゝにのこれるなり。提灯の字あ  
たれり。

進就版申云。御飯賜畢。共拍手三度先後稱唯觴三行亦拍手一度などある。是膳部が打と同じ心ばへなりければ、かゝる類より膳手拍とはいひ出しなるべし。飯酒の時に拍手も實は樂み歎ぶ心より拍なり。又物を受取るとして拍ことあり。貞觀儀式、園韓神祭儀に、カタコト蘷木綿を賜ふ處に「神祇官人又參議以上。五位上位諸司判官以下。召使以上。諸司史生以下。歌女以上並拍手受之」また平野祭儀に、蘷木綿を賜ふ處に「云々。轉三獻皇太子。拍手稱唯受而着之云々」また、九月十一日、奉伊勢大神宮幣儀に「勅忌部參來。忌部稱唯升殿跪拍手四段。先執<sup>ニ</sup>受宮幣<sup>ニ</sup>授後執<sup>リ</sup>。大神宮幣<sup>如元</sup>自持復版<sup>手一段</sup>」大神宮儀式帳、六月祭儀に「即大神宮司以御蘷木綿參入豆正道同重跪向<sup>ニ</sup>大神宮侍。即命婦退出受取奉親王爾。即親王拍手互取木綿着禮。大神宮司復執太玉串<sup>ニ</sup>參入豆跪同侍。即命婦亦出受取奉親王爾。即親王拍手互自執豆捧參入云々」これらは自物を得て歎ぶには非ず。たゞ物を受取として拍なり。今世に商人などが物を賣買して手を拍も、是遺風なるべし。又約定する時に拍もこれより轉れる歟。かくて神

拜に拍手わざはいろいろに云なれどももとよりの神習とは見えず。儒佛の禮奠に擬ひて神職の家に作り出ること、見えたり。

○てうづ 落くば物語、一之上「あこぎ御手水、粥いかで參らんとおもひて云々」同「三の君の御手水、まゐるとてめさるれば立ぬ云々」

○手洗の粉 和名抄「温室經云。澡浴之法用七物。其三曰澡豆。本草綱目。豌豆條下。時珍曰。作二

深豆去二點。令人面光澤」澡豆は今あらひ粉也。侍中群要御手水の處に「澡豆。主水式供御月料。

澡豆料。小麥二升五合」主水式にも「小豆三升。澡豆料」とあり。江家次第「御手水の粉」異本に「糠粉」ともあり。今小麥熟小豆皆あらひ粉に用ゆ。千金方。卷六、外臺祕要卷三十二、白豆、豌豆、小麥、

小豆等の内に諸藥を加へて製するよし見ゆ。

○てうど 調度也。拾遺集、雜戀「ほどなくて

うどどもをばこひかへし侍りければ」今昔物語廿六十七「利仁ガ共ニモ調度カケ一人、舍人男一人ハ有ケル

デウキ

○條目 カヂマ 个條 先そ式目の類には、一云々之

○てかくばかり こは手のとくほどかきを云。後拾遺集、誹諧、題しらず、天台座主「雲にていかであふぎとおもひしにてかくばかりになりにけるかな」狹衣、四「名をしみ人のためなるあふぎかなてかくばかりの契ならぬに」源氏松風めぐりきて手にとるばかりさやけきやあはちのしまのあはとみし月」

○手かせ 足かせ 和名抄云「杻。玉篇云。杻械也。說文云。桔<sup>音</sup>手械也。漢語抄云。杻<sup>天加</sup>また械。四聲字苑云。械<sup>胡界反阿</sup>穿木加足也。說文云。桎<sup>質</sup>足械也」

○手形 俗に拳を手形と云は、書ことあたはざる者、手の形指のかたをうつして信とす。楊升庵集云「用禮司市云。以<sup>二</sup>質<sup>一</sup>結信而止証。鄭庚成云。長曰<sup>レ</sup>質。短曰<sup>レ</sup>劑。若<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>手書。買公產曰。漢時下<sup>ニ</sup>手書。若<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>盡<sup>ニ</sup>指掌。黃山谷云。豈細民棄<sup>ニ</sup>妻手形乎。不然則今婢拳不能書者盡<sup>ニ</sup>指掌。今江南田宅契亦用<sup>ニ</sup>手書<sup>ニ</sup>也。蓋手形手書<sup>ニ</sup>石<sup>露</sup>洞<sup>露</sup>所考不<sup>レ</sup>換二字。瀛奎律髓范石湖詩。異時書判如<sup>レ</sup>鐵」

○てがたらぬ 「て」を見よ。

事と條を分て擧るが多き故に、それを條目といひ、其條數に就て箇條とはいふ。たとへば元和式目を官署の詞にも、御條目といひ、世俗にも其類の式目を凡てしかおぼえたり。後漢書<sup>五十</sup>東夷傳中、漢傳云「昔武王封箕子於朝鮮。箕子教以禮義田蠶。又制八條之教云々」注云「前書曰。箕子教以八條者。相殺者以當時價殺。相傷者以穀償。相盜者男沒入爲其家奴女子爲婢。欲自贖者五十万」

○手負 ハサシ 古事記中に「賤奴が手負てや死」<sup>ナラスギナン</sup>「普武王封箕子於朝鮮。箕子教以禮義田蠶。又制八條之教云々」注云「前書曰。箕子教以八條者。相殺者以當時價殺。相傷者以穀償。相盜者男沒入爲其家奴女子爲婢。欲自贖者五十万」

○手負猪 ハサシ 古くはいかりむといへり。古事記、詞志比宮段に「大怒猪出」<sup>ナルイカリキイデ</sup>、雄略紀に「嗔猪從<sup>ニ</sup>草中暴出逐人<sup>サツラ</sup>徒<sup>ボリチ</sup>綠樹大懼」<sup>ハカニナツサツラ</sup>拾遺集物名<sup>キサ</sup>歌に「いかり猪の石をくみて噛來<sup>キサマ</sup>しは象の牙にこそ劣らざりけれ」

○てがある 「て」を見よ。

○手書 重之集「三位の大貳は故小野宮の大殿の御子也。わらはより殿上などし給へりけり。宰相をかへしてまつられて、大貳になられて下給へるを道風はなしてはいとかしこき手書におはして、手本などはつくしへぞかきにつかはしける」

○覗面 ハタク 手書 重之集「三位の大殿の御子也。わらはより殿上などし給へりけり。宰相をかへしてまつられて、大貳になられて下給へるを道風はなしてはいとかしこき手書におはして、手本などはつくしへぞかきにつかはしける」

○覗面 ハタク 五燈會元云「覗面相呈未<sup>レ</sup>作家」燈錄云「覗面相呈未<sup>レ</sup>作家」

○てぐす 魚を釣る糸にテグスと云あり。蕃國より來ると云。薩摩の人話に「今にては薩摩の國にて此物を制す。山中に一種の蟲有て、自然蟲の如くに口より糸を吐て、それをもつてちいさき瓢の如き者をくむ也。甚だ硬きものなるが、其糸を吐んとする時を考へて、其糸の端を鉤<sup>ハギス</sup>にて挟みて引出すとテグス出るなり。されども船載の物にくらぶれば其色赤くて劣れり。其虫の名を知らず」といひき。彙苑詳註には「廣西南陵府横州。其地楓始生葉有<sup>レ</sup>蟲光明如琴絃。海濱蠶人鬻之作釣繩甚適<sup>ニ</sup>子用<sup>ニ</sup>ト云、又正字通樟字の注に「樟蟲は體に入れば死す。食<sup>レ</sup>之。蟲形似<sup>レ</sup>蠶而赤黑。四月間熱則人壁取<sup>ニ</sup>其絲。」ト

其腹中の筋を引けば、長さ丈餘あり。閩人用<sup>ニ</sup>綠浦扇を作る。名を蠶絲と云。亦魚を釣べしと云」さらば薩摩にある蟲の名は樟蟲にて、其絲は蠶絲と書べ

き也。

○手ぐすねをひく 井蛙抄云「文覺上人、西行を見てうちにて手ぐすねをひきて云々」

○手縲 太平記八山崎合戦之條「洛中の商賣留りて、士卒みな手縲のたすけにくるしめり」曾根好忠集「夏引のしら糸のてぐりまだしきによるは短かく成にけるかな」

○てこな 曾根好忠集四月中「うつぎ原てこなが布をさらせるとみえしは花の咲るなりけり」

○手代 園太曆、延文四年十月條に「慈嚴僧正云々。以手代玄圓法印可令勤修云々」とあり。

手代といふこと、ほうしにもいひしにこそ。

○手玉 和名抄云「弄丸」梁武帝千字文注云「宣遼者楚人也。能弄丸」世間云多末斗利八在空中。一在三手中。今人之弄鈴是也。楊氏漢語抄云。弄鈴。須々止利」とあり。此弄丸、今世の手玉也。昔は鈴もとりしなるべし。(猶いしなご)を參照せよ。)

○てだり てとりの訛か。今てだれと云。長明無名抄、上「後德大寺のおとやは左右なきて、だりにておはせしかど」

○てつだひ てつだひしたるふみどもに、てづめは俊成卿千載集をゑらびしときてつだひしたる人なり。道具の妻にて後に嵯峨禪尼と申」

○てづ、歌の事を論じたるふみどもに、てづめは俊成卿千載集をゑらびしときてつだひしたる人なりといふこと見えたり。こは俗にツラミジカイなど云と同じく、つまるのツラミジカイと同語にて、音便にて上あるひは下又は上下ともに濁る也。思ふ所まで行とくかぬ意也。テは様なり。紫日記「いちといふもじをだにかきわだし侍らず、いとてづめにあさましく侍り云々」續世繼みかさ「日本はゆしうづなる國かな」新猿樂記「織紙裁縫甚以手筒也」

○築花物語ひが「あなてづ、闇白の人わらはれなることを」

○てつゝみ 「くさかり笛」を見よ。

○てつへん 東國の方言に、頭上をてつへんといへるは、兜の天邊より出たるにて、亂世の詞の遺れる也。保元平治物語云「兜のてへんへ熊手を打かけんと綴て走る」源平盛衰記、宇治軍の條に、足利又太郎忠綱が下知して云ふ詞に「あまり仰きて内兜

射さすな。あまりうつぶきて、天邊射さすな」又「義經もあひ引して、しころ射らるな、いたくうつぶきてへん射らるなとの賜ひしに云々」此外太平記に「天邊直中」などもかきたり。こは甲の頂上にて、神宿とも、八幡座ともいへれど、戰場にては専らてへんと云習へり。

○て、父 祖父 空穂物語祭使「て、なども人になさけなく」築花物語月「て、とてぞこひきこえ賜ふ」同衣袴おほて「がおしましけるを」大和物語「て、は、のかなしくする人なりければ」空穂物語後降「ことの手母にもまさり、母はての手にもまさりて」

○手つかひ 藤原爲忠「つくばねのみねにすむなる鷺の羽にさねきてみゆるさるの手つかひ」

○でつきん 「じつきん」を見よ。

○手作 萬葉十四子七「玉河にさらす氐豆久利さらくに何ぞこの子のこ、だかなしき」夫木抄、十四、秋、光明峯寺入道攝政「落たざつしらゆふなみにはつせめのおのがてづくり打衣かな」これは布の事にして、既に其名となりたるなれど、もとは何の上に云もおなじこと也。

○てつだひ 自讚歌宗祇注云「俊成卿のむすめは俊成卿千載集をゑらびしときてつだひしたる人なり。道具の妻にて後に嵯峨禪尼と申」

○てづ、歌の事を論じたるふみどもに、てづめは俊成卿千載集をゑらびしときてつだひしたる人なりといふこと見えたり。こは俗にツラミジカイなど云と同じく、つまるのツラミジカイと同語にて、音便にて上あるひは下又は上下ともに濁る也。思ふ所まで行とくかぬ意也。テは様なり。紫日記「いちといふもじをだにかきわだし侍らず、いとてづめにあさましく侍り云々」續世繼みかさ「日本はゆしうづなる國かな」新猿樂記「織紙裁縫甚以手筒也」

○爺打栗 ワチリ 丹波より出す打栗をて、うち栗といふにつきて、昔爺を打しなどいふ附會の妄説をいひ出せし也。此物飛驒國より出すが殊に佳味なりとて丹波よりも多く出すといふ。其國の人のかたりしは彼國にて杵の小きを手杵といふ。其手杵を小兒詞にて、といひて、て、打栗とは、もと兒童のいひそめたる詞なるが、つひに名となりて弘りたる也といひり。

○て、ら 東國北國の邊土にては、齧鼻をして、かしらわざするを、て、れをすなどいふことあり。江戸にて、こしやくなどいふほどの所也。和名抄に「団、唐韻云。團ハ音漢語抄云。天々禮。網鳥者媒也」とあり。是より出たる詞なるべし。

○手とり足とり 竹取物語「又かなへのうへより手とり足とりして、さげおろしてたてまつる」とあり。是より出たる詞なるべし。

○手とりなべ 「手とりなべ汝が口はさしでたぞさうすゐたくと人にかたるな」古くは足鼎アシダケといへ

○手まどひ

手に物もつかずといふがごとし。

小世繼云「うれしさに手まどひをして參たり」空穗  
俊蔵がく生のざえあるをのこども手まどひをして云々落くば、一之下「北のかた手まどひしたまふ云々」

○手鞠

羽ごの子

搔羽

手まりとはごの

こは、蹴鞠の足もてあぐると打鞠の杖もて、打とを、便よくなして、兒女の遊びにくばりたるなるべし。いつの比よりの物とは慥にも知がたかれど、一條禪閣の書給ひし尺素往来に見えたれば、やゝふるき物なるべし。尺素往来「園葵、將碁、双六、下作、楊弓、手鞠等終日可張行候。」此手まりはごのことを、もはら正月のあそびとせしも、「百年昔よりの事也。寛永の比那波道圓が遺墓詩の中、元日の作にあり。

活所遺墓六癸未元日詠懷「晨興盥漱遣心遐。待得新年鬢只華。兒女不知饑歲夏。擊毬搔羽笑聲譁。」手鞠といふ名のものにみえたるは、平治物語を始とせん歟。

其次ハ東鑑、弁内侍日記、増鏡なり。明月記「嘉祿三年十一月十九日。上略、三字物名賦之。甚固被置懸物令悦目手鞠、檜扇、五節柳。枕、燒石裏、墨筆、檀紙」吾妻鏡

廿六、ひとつとやふたつとやなどいふ事は、和泉式部冊子、道命阿闍梨がかんじこりの歌をもて始とす

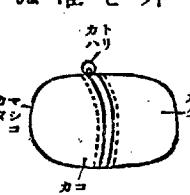
廻國雜記に「まりこ川又わたらせやかへりあし」とは今童女が手まりうたに「おわたし申受取た」とうたふ事あり。古歌の殘れるなるべければ、其頃手まり唄ありし事しるし。とある人の説也。按にはふとおもひたがへたるものなり。手まりにいかでかへり足といふべきぞ。これも蹴鞠の事なることしるし。

すべて蹴鞠にさまぐの詞あり。のべ足、かへり足など皆其詞なり。又鞠には、ましこ、かたとり革こし革などいふ所あり。又壹人して

持分の鞠を、もち鞠といへば、外へやるをわたすといふ也。又受とるをとり鞠といふなり。さらば准

后のまりこ川云々も、手鞠ならぬことうたがひなし。(猶)かひおほひ」を参照せよ。)

○手むかへ、今昔十六廿種「皆如此ノ被取タル者共ナレバ、手迎へセント不思」盛衰記ニ「其庭ニシテ手向へスベキニ慮病ノ至リカ」今昔廿五「何事ニ



多かり。

○てらのねずみ 催馬樂、老鼠に「西寺のおいねずみわかねずみおへもつんづけさつんづ云々」寺

にては捕事をせざれば、年經ていと大きくなるが柄ものなれば、今もお寺の鼠といふことあり。

○てりくぼうし

蜻蛉日記下に『今かゝる雨

にもさはらで、おなじ所なる人ものへまうでつゝさはることもなきにとおもひて出だれば、或者女神には、きぬ縫て奉ることよかなれ。さし給へとより來てさゝめけば、いで心みんとて、縫のひな衣三つぬひたり。したがひどもにかうぞかきたりけるはいかなる心ばへにかありん、神をひとへに

々「なつ衣たつやと見るちはやぶる神をひとへに人してゆはせられ侍しはてに、ゆふ人はてれく日頼む身なれば」辨内侍日記「今出川殿へ行幸ならんとて、夜雨ふりげに侍りしに、とうたいのくひを七人官にまふべきよし人々おほせられしに、あまりにあ

るべくもおはえで、つばねにかくれて侍しかば、都々乎文哉を讀誤て、都々乎文我。この都々乎文我を、誰も解し得さりしを、田汝成解て云、杭の諺に、社師論語の都々乎文哉を讀誤て、都々乎文我と教へければ、時人これを嗤て都々乎文我、學生満堂、都々乎文哉、學生不來と云事ありと見ゆ。世には此類ひの事常に

いよといふ人まひけるとぞ。辨内侍「かちをとるそ  
の舟人にあらぬ身のあすの日よりをいかゞいのら  
ん」帝城景物略、下、春場部云「雨久以三白紙二作三婦  
人首。剪ニ紅綠紙衣レ之。以三若幕苗ニ縛ニ小帝。令レ携  
之。竿懸ニ簷際一曰ニ掃晴娘ニ云々」陔餘叢考廿にも  
此事を出せり。

○手分 明月記「文暦二年十二月廿二日。今朝  
武士已而了爲用意手分」

○出居　いでの　ひたひ付たる出居　御堂  
關白道長公御記時代寛弘三年三月乙巳參内。南殿五  
々。母屋御簾内廻敷高麗端疊。南廂邊二間。南六間  
百間之。御簾皆間立大床子一脚。從南三間西間敷

西間上。御簾當階間立大床子二脚。從南三間西間敷高麗端疊。爲公卿座。坤高欄邊敷紫端疊。一□爲出居。高渡敷座泉上。又敷座有脇息沈。明月記「建久七年五月廿五日。朝座之間陰雨大風。眼驚心恐。願嚴重之間。天神降自上。地祇昇於下歟。堂上如油庭中似海。仍出居座疊。引上長押上了。公卿出居。將入自渡殿。鬼間妻戸徘徊云々」沙石集「善阿僧正の坊へ參す。高野ひがさに脛高なる黒衣きて異様なつけれども、しかくと申入たりければ、高野ひじり

と聞て、なつかしく思はれるにや、ひたひつきし  
たる出居によび入て、高野の事後世の物語など通  
夜せられけり」これらによりておもふに、出居座は  
椽の上にて庇の間なり。是は母屋の簾の外にて、長  
押と有は母屋と庇との間の敷居なり。今も田舎の人  
は、客人を先請する座敷をでるといふ也。古語の遺  
りたるもの也。又「ひたひつきしたる出居」とは、  
今云「さしけ廂」など云物歟。漢人の家作に楣と  
いふ有。人の眉の所にあたればいふよしみえたる、  
其物に似たり。翠簾の帽額も人の額にあたるゆゑに  
云。もしその類ひ歟。古き繪に〔如其欄間あり

○手をあさふ　一あさべ「」を見よ。  
○手をいだす　源氏物語常本「いかで此人の爲に  
となきてをいだし」同花<sub>末摘</sub>たゞ大かたの御物つゝみ  
のわりなきに、てをえさし出給はぬとなんみ給ふ」  
○手を拍つならはし　「うちやげ」を見よ。

身徇物、火手外炎々履水中慄々」四十二章經云「佛言  
愛欲人猶執炬逆風而行。必有燒手之患」大智  
度論云「譬如燒金丸。雖眼見其好不可以觸  
燒人手」蘇軾絕簡集云「祇怕其手可焦也」  
○手をわからちもとむ 竹取物語「みな手をわから  
ちてもとめ奉れども」大和物語「手をあからちて求め  
さわぎけり」榮花物語そわう「こもちの御前のものど  
もは、みなあべいさまにしおかせ給ひて、たゞもの  
ばかりのはどにあれども、猶こゝろあわたゞしうて  
手をあかたせ給ふ」

○手をわけて 空穂物語只、そ「たゞ今あやしがり、もとめさせ侍りとそうさせ給ひて、手をわかれちて大願たてき、もとめさせ給へどなし」

○田樂 蒲燒 日本史「堀河帝。永長元年丙子秋七月十二日己亥。使侍臣爲田樂。十三日庚子上皇白觀田樂。自是朝野盛行」常陸國誌云「久慈郡金沙河有三神祠。七十二年有大祭。其日有田樂。爲三種

々俗舞雜伎。名曰田樂。按田樂者古昔大行於世。  
朝野群載。江納言匡房洛陽田樂記云。永長那元年之  
夏。洛陽大有三田樂之事。初自二閭里及於公卿。高

足木<sup>アシ</sup>長<sup>ロウ</sup>有<sup>リ</sup>一足也。眞腰鼓。振鼓。銅錢。子編才。殖女。養女<sup>ヒメノコ</sup>以上之類。日夜無<sup>シ</sup>絶。喧嘩之甚驚<sup>ハシマ</sup>人耳。太平記二十康永四年八月十六日。三社ノ神與ヲ中堂へ上奉リ。祇園北野ノ門戸ヲ開師子田樂庭上ニ相列リ。神人社司御前ニ奉仕ス。また二十一ノ鷲本座ノ阿古亂拍子ハ新座ノ彦夜叉、刀玉ハ道一、各神變ノ堪能ナレバ見物耳目ヲ驚ス。角ヲ立合終リシカバ、日吉山王ノ示現利生ノ猿樂ヲ肝ニ染テゾ出シタル。斯ル處ニ新座ノ樂屋八九歳ノ小童ノ面ヲキセ、御幣ヲ差上テ赤地ノ金襴ノ打懸ニ、虎皮ノ連貫ヲ蹴開キ、小拍子ニ懸テ、紅綠ノソリ橋ヲ斜ニ踏テ出タリケルガ、高欄ニ飛上リ、左へ回リ、右へ曲リ、抛返テハ上リタル在様、誠ニ此世ノ者トハ不<sup>シ</sup>見。忽ニ山王神託シテ此奇瑞ヲ被<sup>シ</sup>示カト、感興身ニゾ餘リケル」北條九代記十二高時奢侈條「新坐本坐の田樂六十餘流、二千余人在<sup>シ</sup>。是を在鎌倉の大名その分限に應じて預けられ、美女遊興の爲に高時一献をすゝめ、田樂一曲を奏すれば云々」太平記五「又その頃洛中の田樂を観ふ事盛にして、貴賤こぞりて是に著せり。相摸入道此事を聞及び、新坐本坐の田樂を呼下して、日夜朝暮に

観<sup>シ</sup>事他事なし」尺素往來云「爲勧進一本坐新坐田樂、和州江州田樂。各可<sup>シ</sup>播<sup>シ</sup>所能候。殊見物志候。棟敷四五間打簡可<sup>シ</sup>被<sup>シ</sup>塞<sup>シ</sup>之候」いかなる手ぶりなるものか知がたれど、此程世に行はれる事、これにて見るべし。今昔物語十「白裝束したる男ども、件の馬をひきよせ打乗て、ひた黒なる田樂を腹にゆつけ、左右の手に桴をもち、笛をふき、高拍子を突、机をさして、さま<sup>シ</sup>の田樂を二物三物にまうけて、ふきたてるふ事限なし。(此に、田樂を腹にゆひつけ、桴もちたるといへるをおもへば、田樂とは其もたる樂器太鼓やうの物をいへるにあらん。二物三物といふも、樂器の事とさこえたり。或野史にいへるは、寛永の頃迄も此態のこりて、其比田樂法師とて、街衢に竿を建てのぼりて、太鼓打、舞などして錢を乞ふものありけるが、其者の姿に似たりとて、茄子或は豆腐などを串にさしてやくを、田樂とは云なりとあり。是はおぼつかなき書なれどもかの館の蒲焼といふも、昔は簡切にして串を刺して焼けるが、蒲の穂の形に似たるより云そめたるよしなればある事にやあらん。但し右の今昔にいへるさまをお

もへば、かの腹に物付たる狀の似たりしにもや有けん。」本朝俚諺云「今俗間豆腐をこまかにきり、未<sup>シ</sup>をつけあぶり食す。これを田樂豆腐といへるは、田樂法師どもの、はじめて製して食せし故に名とせり。仁和寺尊海僧正吾妻路記云「尾張國田樂が窪といへる野をゆけば、山たち出るよしをさへて「あぶりたる山たちともが出あひにくしさしやせん田樂がくは」

○天下泰平

呂氏春秋云「天下泰平萬物安寧」

邵堯夫詩「天下泰平無一事」

空穂物語後藤「右のおと<sup>シ</sup>かくばかりなる山にたれかものゝ音しらべてあそびるたらん天狗のわざにこそあらめ」

○天狗たをし 深山などにまゝある事也。癸辛雜識云「丙申十二月十七日。冬到<sup>シ</sup>是秋。三鼓有<sup>シ</sup>大聲。如<sup>シ</sup>發<sup>シ</sup>火炮。震動可<sup>シ</sup>畏。鷦<sup>シ</sup>犬<sup>シ</sup>鳴。或云天狗壓故也」とあれば、異邦にてもある事也。

○電光石火 石見火電光過隙<sup>アラカツ</sup>「淮南子云「人生天地之間、如<sup>シ</sup>鑿

○傳奏

後憲昧記「應安二年三月廿八日。又聞

山門事。今夕武家付傳奏<sup>シテ</sup>藤中納言武家使者攝津とあり。又御厨子預筵饗錄に「明應五年六月三日。勸修寺大納言教秀武家傳奏辭退。親長卿記ニナリ」とかげり。  
○天子空ごとせず 空穂物語「天子空ごとせず」といふ事はなき世也とこそおもふらめ  
○てんしん 後浦前小食<sup>シテ</sup>爲<sup>シ</sup>點心」と云。輒畔錄八葉「今以<sup>シ</sup>早飯後午前午後晡前小食<sup>シテ</sup>爲<sup>シ</sup>點心」とあり。園太曆「康永三年九月十六日。壬寅晴。今日上皇可<sup>シ</sup>臨幸天龍寺<sup>シテ</sup>中略於<sup>シテ</sup>南面客殿。先供<sup>シ</sup>湯。次供<sup>シ</sup>點心。次茶也」とあり。此外にもあるべし。又禪家ニ點心と云こと多あり。  
○てんじんの名號 「さんしやのたくせん」を見よ。  
○天生自然 小子語類云「天生、自然如<sup>シ</sup>此」

○天道 空穂後藤「空穂<sup>シテ</sup>むすめはてんたうにまかせたてまつる云々。わが子の行さきのおきてせずなりぬ。天道にまかせたてまつる」

○田地 史記云「以好<sup>シ</sup>時、田、地、善<sup>シ</sup>可以<sup>シ</sup>家<sup>シ</sup>焉」

「人にてんつかるべきあるまひはせじと云々」

「どなた」を見よ。一

天にせぐゝまり地にぬきあすす

「とだれ」を見よ。一

蓋高不<sup>レ</sup>敢不<sup>レ</sup>局。謂<sup>ニ</sup>地蓋厚不<sup>レ</sup>敢不<sup>レ</sup>踏

○天然飛礫に猪をうつ。丹波の土民、山に入て

栗を取けるに、奥山より熊一疋子をつれ來り、谷川のそばなる石をいだきあぐれば、子其石の下に入て

蟹を取てくらふと見ゆ。其折ふし栗取の男木にの

ぼりて居けるが、いかにしけん、栗四つ五つ取おとす。

熊これにおどろきいたる石をすてたれば、下なる子おされて死けり。熊かぎりなく悲鳴しける

が、十段ばかり側に野猪のふしゐたるを、かれがわざとやおもひけん、たけりかゝるに、猪もおきあが

り半時ばかりたゞかふに、野猪は前足一ヶうち折れよこばら胸のあたりをひきさかれ、熊もところく

かけられて、二疋とも死せり。中山氏醍醐隨筆にみえたりこのことわざにかなへり

○田舞  
三代實錄「貞觀元年十一月十六日。丁卯。大嘗祭云々。十九日庚午。撤<sup>ニ</sup>去悠紀主基兩帳。天皇御三豐樂殿廣廟二宴三百官。多治氏奏<sup>ニ</sup>田舞一伴佐伯兩人久米舞云々」

○轉物

「ころす」を見よ。

○田夫野人

唐鑑云「范淳夫曰、天寶之亂、田夫

野人皆知之」

涅槃經曰「田夫種殖」梅聖俞詩「田夫

○傳聞

後漢書五十延篤傳。篤聞乃爲書止文德

曰。夫道之將廢。所謂命也。流聞乃欲爲求遠東觀

○傳馬

江戸にて芝居狂言見世物等を、價

を出さずたゞ見る者をてんばうといふ。

○傳馬

建武年中舊記「町別錢貸人夫傳馬事。

○傳馬

稱先例被懸百姓之條不可然。向後以撫民之儀可爲領

主之所役」太平記「三人僧徒關東下向之事<sup>中</sup>文觀僧

正忠圓僧正

には相從ふもの一人もなくて、あやしげ

なる傳馬にのせられて、見馴ぬ武士に打かこまれ、

また夜深きに鳥がなく東の旅に出給ふ心のうちこそ

あはれなれ」

## ごノ部

○どうあげ

四季法禮云「煤拂ノ事、年中ノ不

淨ヲ拂テ、新年ノ氣ヲ迎ル意ナルベシ云々。此日タ

ハムレテ新勤ノ人、或ハ加恩ヲ賜ハル人、或ハ婚姻

「人にてんつかるべきふるまひはせじと云々」

「どなた」を見よ。

○てんくむきく 「どなた」を見よ。 -

天にせぐゝまり地にぬきあすす

蓋高不<sup>シ</sup>敢不<sup>シ</sup>局。謂<sup>ニ</sup>地蓋厚不<sup>シ</sup>敢不<sup>シ</sup>踏

栗を取けるに、奥山より熊一疋子をつれ來り、谷川

のそばなる石をいださあぐれば、子其石の下に入て

蟹を取てくらふと見ゆ。其折ふし栗取の男木にの

ばかりて居けるが、いかにしけん、栗四つ五つ取おと

す。熊これにおどろきいたる石をしてたれば、

下なる子おされて死けり。熊かぎりなく悲鳴しける

が、十段ばかり側に野猪のふしめたるを、かれがわ

ざとやおもひけん、たけりかゝるに、猪もおきあが

り半時ばかりたゞかふに、野猪は前足一ヶうち折れ

よこばら胸のあたりをひきさかれ、熊もところく

かけられて、二疋とも死せり。中山氏醍醐隨筆にみえたり

○田舞ダンブ 三代實錄「貞觀元年十一月十六日。丁

卯。大嘗祭云々。十九日庚午。撤<sup>ニ</sup>去悠紀主基兩帳。天皇御<sup>ニ</sup>豐樂殿廣廟宴三百官。多治氏奏<sup>ニ</sup>田舞。伴佐伯兩人久米舞云々」

○轉物<sup>チヤンブ</sup> 「ころす」を見よ。

○田夫野人<sup>チヤンブ</sup> 唐鑑云「范淳夫曰。天寶之亂、田夫野人皆知之」涅槃經曰「田夫種殖」梅聖俞詩「田夫指<sup>ニ</sup>白水」孟子云「東齊野人之語也」

○傳聞<sup>チヤンブ</sup> 後漢書五十「延篤傳。篤聞乃爲書止文德

曰。夫道之將廢。所謂命也。流聞乃欲爲求還東觀

○でんぱう 江戸にて芝居狂言見世物等を、價

を出さずたゞ見る者をてんぱうといふ。

○傳馬<sup>チヤンマ</sup> 建武年中舊記「町別錢貨人夫傳馬事。

稱先例被懸百姓之條不可然。向後以撫民之儀可爲領主之所役「太平記」三人僧徒關東下向之事略文觀僧正忠圓僧正には相從ふもの一人もなくて、あやしげなる傳馬にのせられて、見馴ぬ武士に打かこまれ、また夜深きに鳥がなく東の旅に出給ふ心のうちこそあはれなれ」

## こノ部

○どうあげ 四季法禮云「煤拂ノ事、年中ノ不淨ヲ拂テ、新年ノ氣ヲ迎ル意ナルベシ云々。此日タ

ハムレテ新勤ノ人、或ハ加恩ヲ賜ハル人、或ハ婚姻

○とうかく 「とかく」を見よ。

○東西々々 相撲芝居などにして、見物の輩を

鎮むるに、東西々々と云は、東より西まで一同静り

給へといふべきを略きていへる詞ながら、西土も同

じ事と見えて、羅大經と云が鶴林玉露と云書に此詞

見えた。

○とうじ 瓶の名を刀自といへること據あり。

延喜式造酒司式に「從五位上大邑刀自。從五位下小邑刀自。次邑刀自三座」文德實錄「齊衡三年九

月辛亥。造酒司酒麿神從五位下大邑刀自。小邑刀自等。預春秋祭」三代實錄「貞觀元年正月廿七日。

ラナス人々寄合、手足ヲ取テ居敷ヲ突事アリ。俗是ヲ胴ヲ舉ルト云フ。此戲イカナル故ゾト云ニ、皆以テ居敷ヲ居サスル祝也」

○東海道 藤原元真集「ことしより君にちとせ

をゆづるはぞとうかいだうにもとめいでたる」

○どう行 金葉集、僧正行尊「大峰の神仙といへる所に久しう侍ければ、同行ともみなかざりありて、まかりにければ、心はそさによめる云々」

○とうかう 「とかく」を見よ。

奉<sup>レ</sup>授<sup>ニ</sup>造酒司從五位下大邑自神從五位上<sup>ニ</sup>などあり。是らを以てみれば、造酒の大體を神にいはひまつる也。神名式に「造酒司坐神六座大宮賣神社四座。酒殿神社二座。酒彌豆男神酒彌豆女神」ありて、三代實錄、貞觀三年十一月條にも此神等に位を授け給へる事見えたり。邑は和名抄に、專字を出して、日本紀云「專領二字、讀太宇女乎佐女」今按、專訓<sup>モロ</sup>太宇女之義也。太宇女者毛波良之古語也。今呼<sup>ニ</sup>老女<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>太宇女。次<sup>ニ</sup>於負耳とみゆ。守部按に、太宇は太布の音便也。本の直音は任字を、公任、宗任、貞任惟任、など訓が如く、其任に堪るよしにて、則長の意、又專一の義なりければ、戸主を云も、酒壺の中の大甕を云も、又狐の古老なるを云も、皆同意也。但し邑字心得がたし。若は長字の誤れるにはあらざる歟。長と邑と字形相似たり。猶考ふべし。

○とうしみ 和名抄云「燈心。考聲切韻云。炷音主爻<sup>モロ</sup>和名度字之美」とあり。かゝれば學者のとうしんと云よりも、俗人のとうしみといふ方古雅なり。

○燈臺<sup>トウテイ</sup> 落窪物語一之下「燈臺に火ともさせて

云々」



## 太平記に「武者

覺之。如三人以指置毒蛇口。如欲以手觸灰覆

の出立を云處に「いまだ已時なる鏡直垂きて」とあ

り。是則今世に四ツ時頃のと云が如し。かゝればや

、古くなれるを、八ツ時、七ツ下りなどいふものも

はやくよりの事とみえたり。

○とぐ 寛平御時、后宮歌合「冬さむみみのも

にかくるます鏡とぐも我なん老まとふべく」

○とくい 得意の音語也。是を商家にて物買方

の家の事として云なるは、得意の心にとりて云そめ

たる歟。音語ながらも古くよりいふこと也。躬恒集

「もとよりのとくいに侍りければ、かねすけの卿に

たてまつる。なづきをつらゆきしてつたへさすとて

つかはす云々」枕冊子四「小兵衛といふ人してまね

ばせてまかせ給へば、あれいかで見はべらん。かな

らす見せさせ給へ。御とくいなほり。さらによもか

たらひとらじなどわらふ」今昔物語六「藤判官とい

ふ檢非違使、つねに藤太夫とくいなりければ」又

同廿七にも又同廿八にもみえたり。

○毒のこゝろみ 太上感應編云「漏肺救飢鳩酒

止渴」涅槃經云「譬如愚人見師子王飢時睡眠欲上

たり とのへん との人 玉勝問三云「童

蒙抄に「山家冬夜といふこゝろを、經信卿、山ざとは夜床さえつゝ明にけりとかたぞかねの音のするは。これいづかたぞと云べきを、とかたぞとよめりいかゞ」とあり。今の世の言にいづくをどこといひ、いづれをどれ、いづち、又いづかたぞといふは、此とかたのとにやあらん」とあり。右のどなた、どのへんななどの類皆准へしてしるべし。

○とこ 所の略なり。隆信集、沓冠「ちかきとこかくこそありけれしりもせよとなりにとなりはしわたること」同、戀一、忍戀「あくがるゝ心のたれかとこに行てあやむばかりの夢にみゆらん」空穂物語としがけ「よをおぼしはなれにけるとこの御すみかになん」

○床のへだし 遊士の田舎にて、床の下敷をへだしといふ。萬葉十四十八に「みなとあしのあしが中なる玉こすげ苅こわがせこ等許乃敵太思爾」然れば此思を知の訛りとして、床の隔ち也といへどさだめがたし。

○ところたがへ 源氏夢浮橋「ところたがへにも

## 火

火薬變じて藥となる。

淮南子「蠍蛇蟄人」傳

以「和菴一則愈」註云「和菴。野葛毒藥」平治物語云「毒藥變じて甘露となるといふことあれば云々」

○とくり 瓶子を德利といふも久しき事なり。散木集、四「參議爲房」「さかもりの胡德樂とも見ゆるかな」かの大父のつけよとありければ「たふとく

りきてまひよろばへば」觀無量壽經二「有衆妙華作閻浮檀金色。如旋火輪婉轉葉門。漏出諸果。如帝釋瓶」科注「記云。妙宗鈔云。釋論第十五云。有人常供養天。其人貧窮一心供養。滿十二歲。求索富貴

天愍此人自現其身而問之曰。汝求何等。答我求富貴。欲令所願皆得。天與一器。名德瓶。而語之言所須之物從此瓶出。其人得已應喜所欲無所不得」猶「たる」

○遂 萬葉集二十「吾せこしとげんといは」とまた三十「何すとか相見そめけん遂とはなしに」七八丁「わがおもふ心とげぬと」

○どこ どれ どちら どのかた どのか あらんに」枕冊子「所たがへなどならば

○とこわか 林葉集、六「いつとなく君によはひをゆづるはの猶とこわかにさかゆべらなり」今俗に年の始に三河國より萬歳とてくるもの、祝ひことに「徳若に御萬歳とは云々」とうたふは、此常若の訛れるなるべし。

○とこゑ 夫木抄、十二、秋、俊頼「つまこふる鹿のとこゑにおどろけばかすかにもみのなりにけるかな」

○とこをとる 曾根好忠「秋はて、わがせなきみのたえしよりねやのよどこをとりぞたて、し」とざし

○とざし 催馬樂、東屋に「かすがひもとざしもあらばこそ、其殿戸われさめ、おしひらいてしませ、われや人づま」和名抄に「局度佐戸」とあり。戸をさし固むる貝也。

○とさまかうざま 左さま右さま也。催馬樂、我門乎に「わが門をとさんかうさんねるをのこ云々。よしなしにとさんかうさんねるをのこよしこざらしや」童蒙抄に「東行南行雲渺々。二月三月日遙々」と云詩を「とさまにゆき、かうさまに行雲はる

○とし切くだものなどの、かつてならぬ年あり。これを年切と云。後撰集、雜、三、法皇『かへりみ給ひけるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそとせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「いかでかのときりもせぬたねもかなあれたらやどにうるてみるべく」同上、齋宮のみ「春ごとにゆきてのみ見ん、」年きりもせずといふ種はおひぬとかきく

には身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

きには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

に「さとにはみ侍りて奉らせ

くるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせ

ける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ

太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそ

とせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「い

かでかのときりもせぬたねもかなあれたらやどに

うるてみるべく」同上、齋宮のみ「春ごとにゆき

てのみ見ん、」年きりもせずといふ種はおひぬとかき

くには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

きには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

に「さとにはみ侍りて奉らせ

くるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせ

ける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ

太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそ

とせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「い

かでかのときりもせぬたねもかなあれたらやどに

うるてみるべく」同上、齋宮のみ「春ごとにゆき

てのみ見ん、」年きりもせずといふ種はおひぬとかき

くには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

きには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

に「さとにはみ侍りて奉らせ

くるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせ

ける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ

太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそ

とせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「い

かでかのときりもせぬたねもかなあれたらやどに

うるてみるべく」同上、齋宮のみ「春ごとにゆき

てのみ見ん、」年きりもせずといふ種はおひぬとかき

くには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

きには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

に「さとにはみ侍りて奉らせ

くるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせ

ける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ

太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそ

とせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「い

かでかのときりもせぬたねもかなあれたらやどに

うるてみるべく」同上、齋宮のみ「春ごとにゆき

てのみ見ん、」年きりもせずといふ種はおひぬとかき

くには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

きには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

に「さとにはみ侍りて奉らせ

くるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせ

ける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ

太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそ

とせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「い

かでかのときりもせぬたねもかなあれたらやどに

うるてみるべく」同上、齋宮のみ「春ごとにゆき

てのみ見ん、」年きりもせずといふ種はおひぬとかき

くには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

きには身のかずならぬ物にぞ有ける」同、雜一、贈

に「さとにはみ侍りて奉らせ

くるが、のちくは時おとろへありしやう

にもあらずなりにければ、さとにのみ侍りて奉らせ

ける、せがるの君「あふこととのときりしゆるなげ

太政大臣「いまでになどかは花のさかずしてよそ

とせあまりとしきりはする」同上、むすめの女御「い

有事故

雅蓮醉狂集、春「ぞりあふつまくれ

なるの末ひろや心の花のはるのとし玉」「韞匱豊年玉」自注論語云「有美玉於斯。韞匱而藏諸」世說云

「世稱庚文康爲豐年玉」

○とし玉 万代集、賀、匡房「八百萬そこ

えの神のとしなみによるひるいのる君がみよかな

○とし男 年男と云」、南都春日社記、應永卅五年正月一日。曉御奉行祐富殿、年男下番神殿守宗時ノ代

官宗繁一面一瓶持參ス。時神主殿ヨリ鏡一面ツミクダモノニテ、御酒三献祝了。但下部ニハ小餅一前給

ナリ」とあり。

○とたびの御名 「じうねん」を見よ。

○とちめ うた、ね記「いとかきくらす涙の雨

さへ降そひて、こしかたゆくさきも見えず。おもふ

にもたらす。今とちめはてつる命なれば、身のぬれ

とほりたること、いせのあまにもこえたり」金葉集

秋、神祇伯顯仲「さゝがにのいとのとちめやあだな

らんほころびわたるふちばかまかな」

○とづく 俗に云といくなり。新撰六帖、信實

「さしもこそよはひはながきまなづるのなど毛衣の

あしにとづかぬ」

○とても とては上をうけて、ありとて、なし

とて、然りとてなど、下に付て云言なるを、上より

とても及ばぬ、とても不就など云は、者といふ類の

如し。逆とかく字は後俗の作字也。

○滞 古事記中、垂仁段に「如此逗留之間」

萬葉四十三「衣手爾取等臘己保里哭兒爾毛」とあり。

登杆は留なり。許當流は凝、凍るなど、同言なり。

云とうとも、此止を音便に云るなり。

○とゝのへる 補中抄、二廿「とゝのへて軒に

留りの通音也。どうと捕られた、どうと「びたなど

云とうとも、此止を音便に云るなり。

○とゝのつまり

「いへども、心得がなし。古事記、朝倉宮段に

西市天途」とあり。あまりよく似たればもし是より

ふ者吳都の賑き所にうちたへ来て、戯曰。東市迷方

西市天途」とあり。あまりよく似たればもし是より

出たるか。さらばトシメンバウの一言轉じたるなり。

右大臣「ひつ川のきしににはへるかはざくらちるこ

そ花のとちめなりけれ」

○とちめんばう 事の甚闇しき時あわて迷ふを

とちめんばうといふ。酉陽雜俎卷七「趙生とい

ふ者吳都の賑き所にうちたへ来て、戯曰。東市迷方

西市天途」とあり。あまりよく似たればもし是より

出たるか。さらばトシメンバウの一言轉じたるなり。

○とづぐ 女の嫁するをとづぐといふを、いろ

くにいへども、心得がなし。古事記、朝倉宮段に

西市天途」とあり。あまりよく似たればもし是より

出たるか。さらばトシメンバウの一言轉じたるなり。

○とづぐ 女の嫁するをとづぐといふを、いろ

くにいへども、心得がなし。古事記、朝倉

ふけるなり」空穂後藤と、のへて奉れとおほせらるる時に「是琴の調子を榮花音「ひだりみぎ」と、のへてならひつゝき「同玉臺おののく所々こゑをと、のへよみ誦し「後拾遺、雜一四」と、のへし賀茂のやしろのゆふだすきかへるあしたぞみだれたりける」金葉、夏、左近府生秦兼久「おなじくばと、のへてふけあやめぐささみだれたらばもりもこそすれ」

○と、のめ 「ペエ」を見よ。

○と、のめ 物のをはりを今といふ。古くはとり留るにはいひて、終果の時はとちめといへり。

文詞には常に多く、歌にも新撰六帖「樅川のきしに

にはへるかは櫻ちるこそ花のとちめ也けれ」

○どなた 「とりぐ」 「てんぐ」 「むきく」

となたは誰之方の略語、とりぐは誰々の轉語、てんぐは父とりぐの再び轉じたるなるべし。

○斗なは 「いくなはのかま」を見よ。

○どのあたり 「どこ」を見よ。

○どのかた 「どこ」を見よ。

○殿様 今世に殿様と云も、ことわりなきにあらず。殿は大殿に坐る程のよき人なれば、古くは殿

の某といひたるを、後世に様といひて、尊稱となりければ、其殿の下にそへていふ也。萬葉十四丁十七に「上しだの殿の仲」とよみたるは、國司の守の下なる様目などの人を指事なり。また二十に「殿の若子が取で歎ん」十六丁に「わたつみの殿の御かさ」此外中古の文にはいと多かり。

○どのひと 「どこ」を見よ。

○とのへん 「どこ」を見よ。

○とのゐざる 新撰六帖、二、信質「ふかきよの深山がくれのとのゐざるひとりおとなふ聲のさびしさ」

○とのゐの犬 「いんのこ」を見よ。

○とばしり 雨だりなどの飛かゝるをとばしりといふを、古事記傳に「雹手走など云たばしりの訛也」といへり。今按に、雹の方は多は發語にて、たゞ走意なるべし。今俗に云とばしりは、滴の餘りのかゝるなれば、もとより別にて、飛汗の義にやらん。つぶてといふも飛打の約れるなりといへば、其語勢相似たり。

○とはすがたり 蝙蝠日記中ノ四「文には身をしか

○飛梅 沙石集五「安樂寺の飛梅を」

○飛立 萬葉五三十「とび立かねつ鳥にしあらねば」續紀宣命に「刀比止麻毛」と有。こはさだかならず。

○とびたつばかり 清輔集「あしたづのわかのうらにて有つるに飛たつばかり今ぞうれしき」

○とび立 やうにおもふ 後撰集雜一、もろあきらの朝臣「いにしへもちざりてけりなうちはぶきとびたちぬべきあまのはごろも」

○とぶがごとく 土佐日記、正月十一日「まことに名にきく所はねならばとぶがごとくにみやこへもがな」

○都府樓 大鏡、二「菅原のおと、右大臣の位にておはします云々。昌泰四年正月廿九日、太宰府權帥になし奉りて流され給ふ云々。築紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居處ははるかなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに、又いとちかく觀音寺といふ寺の有ければ、鐘の聲を聞しめしてつくらせ給へる詩ぞかし「都府樓繞看瓦色。觀音寺只聽鐘聲」これは文

へねばといふめれど、前渡りせるせ給はぬ世界もやあるとて、今日なんこれもあやしき、とはずがたりにこそなりにけれとて、をさなき人のひたやごもりならん、消息きこえにとてものするにつけたり」千載、戀一「つゝめどもたへぬおもひになりぬればとはずがたりのせまほしきかな」新古今集、戀一、大納言俊賢母「もろともにあれといはずば人しれぬとはずがたりをわれのみやせん」拾玉集七問聞増戀一「心から妹がなさけを聞そへつとはすがたりを人はせましや」うた、阿佛「おもひがけぬたよりにて、おたぎの近き所にて、はかなきやどり求め出て、うつろひなんとす。かくとだに聞えさせまほしけれどとはずがたりもあやしくて、なくく門を引出るをりしも、先に立たる車あり」堀川百首、權中納言國信「萩の葉のとはずがたりのそよめきにすゝろにめをもさましつるかな」壬二集、上「心をばわが心こそなぐさむれあらましこのとはずがたりに」曾丹集長歌「とはずがたりをあつめたるかも」源氏「あひあさましかりしほどのとはずがたりに」同橘姫「かやうの□□人はとはずがたりにや」同橘姫「か

集に、白居易「遺愛寺鐘歌」枕聽。香爐峰雪撥々簾看」といふ詩にもまさりざまに作らしめ給へりをこそ、昔の博士どもは申けれ』和漢三才圖會八十「筑前

鎮西一名太宰府一往古道太宰帥。爲九州二嶋政。且防異賊。其居名都府樓在國府村之東。親世音村西。大門礎徑六尺余者。

遠于今」

○遠あさ 夫木抄、廿四、雜、獻圓法師「夕河

は波ぢくしろくあけにけりとあさの舟のよるほども

なく」

○遠き親類よりは近き他人 韓非子云「遠水難

救近火。遠親不<sub>レ</sub>如近隣」陳后山詩「不<sub>レ</sub>應<sub>ミ</sub>遠水

救近渴」

○遠きは花の香 説林云「人情貴<sub>レ</sub>鵠而賤<sub>レ</sub>鷄。

鷄近也。貴<sub>ミ</sub>犀象<sub>ニ</sub>而賤<sub>ミ</sub>馬牛。馬牛近也。惟人亦然。

寺隣之人不<sub>レ</sub>重<sub>ミ</sub>僧。而野人重<sub>ミ</sub>僧。非<sub>レ</sub>僧之教行<sub>ミ</sub>於野

人而不<sub>レ</sub>行<sub>ミ</sub>於鄰人也。野人遠而隣人近也。惟賢亦

然。秦始皇重<sub>ミ</sub>韓非。恐<sub>ニ</sub>其不<sub>レ</sub>得<sub>ミ</sub>見。非既至則聽<sub>レ</sub>讒

而誅<sub>レ</sub>之。漢武帝重<sub>ミ</sub>相如。恨<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>與<sub>ミ</sub>同<sub>レ</sub>時。相如既

至則疎而遠<sub>レ</sub>之。惟文亦然。蔡邕得<sub>ミ</sub>王充論衡<sub>ニ</sub>實<sub>レ</sub>之

祕不<sub>ニ</sub>以示<sub>ミ</sub>人也。世遠故也。張竦得<sub>ミ</sub>楊子雲<sub>ニ</sub>大玄法

○とほめ 遠眼なり。濱松中納言「しろ妙にふ

りにし雪とみえつるは梅さく山のとほめなりけり」

風葉集、戀五「春をへてかすみはれせぬ山櫻いかな

る折かとほめにもみん」兼輔集「かすみ立嶺やいづ

くとたづねみん花の遠めをまぎらはす哉」夫木抄、

廿七、花山院「をぐら山おりゐるくもは谷川のかは

べのたづはとほめなりけり」久安百首、親隆「櫻さ

くよもの山べの遠めこそいづれもこしの高ねなりけ

りし夫木抄、十三、秋、好忠「おほひえやをひえの

山も秋くればとほめも見えすきりのまがきに」

○とほる 夫木抄、卅六、雜、光俊朝臣「あら

山のとほりならはぬいはづたひ手向の神にまかせて

ぞゆく」

○通行 道を明る 古事記、遠飛鳥宮段、歌云

「なづくさのあひねの濱のかき貝に足踏すな阿加斯

豆籽富禮」傳注云「令<sub>レ</sub>明而行去れ也。令<sub>レ</sub>明とはか

の足を傷ふべき蠶殻どもをよく掃ひ却て、道を明け

て行去給へと云なり。俗言にも道を明ると云是なり。

源氏末摘花卷に「ふみあけたる跡もなく云々」これ

も雪をふみて、道をあくるをいへり。さて初の二句

言。不屑<sub>ミ</sub>一觀。與<sub>ニ</sub>其人<sub>ニ</sub>比<sub>レ</sub>肩故也」教民要錄云

「美不<sub>レ</sub>美郷中水。親不<sub>レ</sub>親故郷人」

○遠々し 古事記、上卷、八千矛神の御歌に「や

ちほこの神の命は八島國妻まさかねて登富登富斯こ

しの國に云々」傳釋云「遠々しなり。此言古書にも

中昔の書にも、他にはをさく見えずして、返りて

今世には常いふ言なり。出雲より高志國まで遠きを

云。源氏、總角に「うたてとほぐしくのみもてな

させ玉へば云々」こは疎々しきをいへるなり」とあ

り。今世にもおとほぐしく存じますなど、うとく

しき方にもいへり。

○とほくみ 此國の名、近<sub>レ</sub>淡海<sub>ニ</sub>對<sub>ヘ</sub>て、

遠<sub>レ</sub>淡海<sub>ニ</sub>なる事は、萬葉十四十五「等保都安布美」と

よみて、誰もしる所也。此等保都阿布美を約れば、

等保多布美となる都阿を約め和名抄に「遠江止保太

阿不三」とあるは、阿字<sub>ニ</sub>衍<sub>ナリ</sub>なり。萬葉二十六「等保多保美」とよみたるは、布を保に轉じたる也。

今等保等保美と云なるは、多を等に轉じたる也。

○とほ道 紀貫之集「一日たに見ねば戀しき心

あるを遠み、ちさして君がゆくらん」

を、若夏草の靡合たる濱路とするときは、此句は其茂りたる草に隠れて、蠶貝のあるも見ゆまじければ其をよく見明して行去賜へと云意なり。契沖が夜を明してと云ことに解たるは、誰もふと然思ふべきことなれども、さては夜と云ことなくては言足らず。萬葉十一三十「櫻麻乃苧原之下草露有者令明而射去母者雖知<sub>ニ</sub>」この令明<sub>ニ</sub>而も同意也。こ<sub>ニ</sub>は露の千むを侍て去けと云る也。衣ぬらす露の無くなるは道の明く也。」

○泊 在原行平家歌合「ほとゝぎす今宵とまりてかたをかのあしたの原にかへりやはせぬ」押川院百首、中宮權大進仲質「いかなれば夢の枕にゆきかへるかりのやどりにとまるこゝろぞ」賴政集「けふも又山路に柴の庵してとまればすぐるほどゝぎすかな」

○富人子そだてなし 世の諺に富人子そだてなしといへる、萬葉五六十「富人能子等能伎留身奈美久多志湊都良牟綿良波母」とあり。是は實は貧窮問答の長歌の反歌也。

藤原爲忠集「しばしとてと

むる手もなく行としのはやくもあすは春になりに

き」

○とも 従鶴也。竹取物語「さらばおんともにはわていかじ。もの御かたちとなり給ひね」

○ともじ かもじ うもじ そもじ 古

今集の序に「みもじあまりひとじ」といへるは、歌の事なればもとよりさる事なれど、中昔の末となりては、何事の上にも某もじ、某もじといへる事多かり。源氏物語などには別と云ことをすら、わかれといふもじといひ、葵卷には「今はさるものじいませ給へ」などもいへり。今世の女文に父をともじ、母をかもじといふ類も、さるものいひのおしうつりこし故也。

○ともしひきえんとしてはひかりをます 法苑

珠林云「法滅蠱經云。聖王去後吾法滅盡。譬如油燈臨欲滅時、光更猛盛便滅」

○ともす 伊勢物語「人々のほたるのともす火にや」

○ともすり 夫木抄、二、仲正「風ふけば竹の林の友すりにふしやわづらふよはの鷺」頼政集「お

く山の杉の友すり我なれやわがこひゆるに身をこがす也」新撰六帖、信實「ふき過る葉風はさても萩はらや猶友すりの音のさびしさ」

○友だち 友達にて「だちは公達などの達なら用ひたるやうは、今俗にいふともはら同じ。後撰集、春下の詞書に「宮づかへしける女の、いそのかみといふ所にすみて、京の友だちのもとにつかはしける」同夏に「う月ばかり友だちのすみ侍りける所近く侍て」後拾遺集、秋上「こんとたのめて友だちの」空穗後蔭「くまおほかみを友だちにて」伊勢物語「むかしをとこ、つのくに、しる所ありけるに、あにおとともだちひきゐてなにはのかたにいきけり」

○ともなふ 曾根好忠集「みそぎするかもの河風ふくらしもすゞみにゆかんいもをともなひ」

○ともゑ 巴也。鞆にゑがく紋なる故にいふ。帽額に畫く紋をもつかうといふが如し。

○とや 夫木抄、廿七、雜、祭主輔親「あまたとしとやふむ鷹はましろにてかたのの草のしもにこそふれ」

○とらまへる 伊勢物語に「あるじのはらからなるあるじしたまふとき、てきたりければ、とらへてよませける」今とらまへてといふも、ふむをふまでといふ例なりければ、ことわりなきにあらず。

○とられる 一 頼政卿集「てる月に色はとられて卯花の下枝をのみぞ垣ねとはみる」

○虎をやしなうてうれひをのこす 漢書云「張良謂漢王曰。今釋楚不擊。養虎自遺患也」戰國策亦通鑑綱目云「養虎得噬人」

○とりあへず 手向山紅葉のにしき神のまにく」

○虎に翼をつくる 楊子法言云「或問諸吏虎哉々々角而翼者也」韓詩外傳云「無爲虎傳翼。將飛入邑擇人而食」前漢書云「假賊兵爲虎翼」書言故事云「益已強之勢曰虎而翼」日本書紀云

○どやくとほる 夫木抄、廿一、雜、よみ人

しらず「もの、ふのいづさ入さにしをりするどやどやとほりのむやくのせき」

○とらおほかみ 空穗後蔭「あすらまん劫のつみのなかばすぐるまで、とらおほかみむしけらといへども、人のけぢかきをあたりによせず」夫木抄、廿七、雜、後京極攝政「世の中のとらおほかみはなにならす人の口こそなほまさりけれ」

○とらかす 「とろけ」を見よ。

○とらす 空穗、藤原の君サ「いますがる殿にはなでうところかとらすべきといへば」

○とらする 人にやる物をとらすといふも古言也。萬葉、七十八「暴もがとこはとらせん」夫木抄十五、秋、前中納言匡房「こふ人にちのこがねはとらすとも秋くるこそをしくは有けれ」藤原元真

集「ものへゆく人にきぬとらすとて」

○虎に翼をつくる 楊子法言云「或問諸吏虎哉々々角而翼者也」韓詩外傳云「無爲虎傳翼。將

飛入邑擇人而食」前漢書云「假賊兵爲虎翼」

書言故事云「益已強之勢曰虎而翼」日本書紀云

さめけん、とり出たりとみゆる月哉」

○とりうち

「うづらがり」を見よ。

○とりかた

「とりで」を見よ。

○とりかへす

金葉、戀上、藤原惟親「池にす

む我名ををしのとりかへす物にもがなや人をうらみ

じ」

○とりこし

年回を引上する事を取越と云名目

もふるき事也「永正十六年十二月十四日。金譽十七

回忌也明年正月也。雖然年始依不辨取越了」

○とりつき

清慎公集「とりつきなどは御つき

くのむすめたちなどぞし給ひける」

○とりつく 夫木抄、八、源仲正「人しれずし

たばのくすのまくりでにいざとりつかんひめゆりの花」同、舟六、雜、俊頼「道すがらぬしなきこひや

あくがれてかへる我身にとりつきぬらん」

○とりつくかたもなき 夫木抄、廿八、雜、中

務卿みこ「み山木の末まではへる玉かづらとりつく

かたもいまはなき身か」

○捕人 捕方 古事記中、日代宮段に、倭建

命に詔之、「西方有熊曾建二人。是不伏。无禮人」

ん」「みらさびて鳥たに見えぬ島なれば此かはほりぞうれしかりける」

○とりなす 夫木抄、舟六、雜、喜多院入道二

品のみこ「さしもあらぬ時雨なれども玉かしはこと

にとりなすよはのとかな」

○鳥は枝のふかきにあつまる 淮南子云「水積

而魚聚。木茂而鳥集」劉向叢說云「樹高者鳥宿之」

素書云「樹秃者大禽不栖」臣軌云「水深而後有蛟

龍」此二説も右の諺のこゝろにひとし。

○とりはし 夫木抄、十二、秋、源師光「はつ

かりのをしねと、ほし今ははや家ゐする程になれる

由里

○取持 神樂、湊田「みなと田に、くゞひやつ

をりや、ところちなや、ところちなや、やつながらとろ

ちなや」考云「取持の無やと云也」登留毛知の留毛

の約、呂なればなり。

○取持 古事記、上巻に「次思金神者。取持

前事、爲政」萬葉十七四十四に「乎須久爾能許等、登里

毛知底」十八三十三「大君能末伎能末々爾々等里、毛知底

都可布流久爾能」三代實錄廿九十五詔に「右大臣藤原

等。故取其人而遣」また「取伊服岐能山之神幸行」萬葉六に「千萬乃軍奈利友言舉不爲取而可來男常曾念」これらの取に同じ。此中に取と云て、殺を兼たる多かり。水垣宮段に「令殺玖賀耳之御笠」穴穂宮段に「人取天皇」などある類也。常に鷹の鳥を取、猫の鼠を取、鶴の魚を取など云類も、もと

同意也。

○取どころ 堀河百首、河内「人よりも時雨の

音をさくことやあれたらやどのとりどころなる」山

家集、下「こゝろをば見る人ごとにくるしめてなに

かは月のとり所なる」後拾遺集「郭公よぶかき聲を

さく時ぞ物おもふ人のとりどころなる」山家集、上

「岸づたひをしてつゝじを手にぞとるさかしき山の

とりどころには」寂然集「月かけを袖にうつしてみる

のみや物おもふ人のとり所なる」詞花集、秋、永源

法師「やへむぐらしげれるやどはよもすがらむしの

ねさくぞとり所なる」

○とりく 「どなた」を見よ。

○鳥なき里のかはほり 和泉式部家集に「人も

なく鳥もなからん嶋にては此かはほりも君もたづね

給ふ」同かのり「大將の君なんとりもちてつかうまつり給ひける」これらはとりはやす也。

○鳥居 鳥居といふ名、凡て古き書にみえす。

延暦儀式帳に「御門十一門」とありて、下に「於不

御門三門。於不葺御門八門」とある、この於不葺御

門といへる、即今の鳥居なれど、其稱なし。されば

其不葺御門の、鳥の止り木に似たるを以て、遙に後

の人、かの天の岩戸屋段なる長鳴鳥のふる事を思ひ

て名づけそめたるが弘りたる名なるべし。是を佛家

四門などに説つけて、むづかしくいひなすは、なか

くにひが事也。相模集「ならの鳥のまへなるき

ともにかけたる物おほかり「なにならんならの社の

神にはゆふとは見えぬ物をかゝれる」夫木抄、廿、

雜、源仲正「とりあたつあふさか山のさかひなるた

むけの神に我ないさめそ」同、廿七、雜、從一位家

陸「霜しろき神の鳥居の朝がらすなくねさびしき冬の山ざと」和名抄云「鷄栖。考聲切韻云。梧毛報今之門鷄栖也。辨色立成云。鷄栖鳥居也。楊氏說同」とあり。是は門戸類にて、人の家に就ていへり。されば神社の鳥居ももと人間の門の鷄栖よりうつれるか。天之岩屋戸段に長鳴鳥ありて、よしありげにもおもへど、古き物に鳥居の事たえて見えず。今とりゑといふは訛る也。

○とる 女を犯すをとるといふことあり。神樂  
譜「協母古にわがせの君はいつゝとりむつとり云々」

催馬樂、挿櫛に「あしたにとりようさりにとり」と  
へる是也。委しき事は、波釋入鏡にいひつ。

○どれ 「ムー」を見よ。  
漢書外戚傳曰「房興、宮對、食、應劭  
之三舅也」

○とれあひ 漢書外戚傳「房妻王氏」房と宮とは二  
註云「宮人自相與爲夫婦。名對食」房と宮とは二

○どろ 「とろけ」を見よ。

○とろけ　とろく　とらかす　とろ、汁  
物の解るをとろく、解るといひ、又解たる

泥をどろと云類も、むげに卑き俚言にはあらざるか。

○とんぼう やんま んば エンバン  
蜻蛉をとんぼとも、やんまとも云。國によりて小なるをとんば、大なるをやんまと云、又此とんばやんまと、國によりてゑんばといひ、其赤きを赤ゑんばといひ、又やゑんばともいふ國あり。此やゑんばぞ古語のまゝなる。即八重羽の音便なり。なべて鳥虫の翼は二の物なるに、此蜻蛉のみ四つある故に、八重羽とはいふ也。さればやんまもゑんばも皆やへんばの略にして、とんばは其訛也。袖中抄三十一「あきつは蜻なり」著聞集、駒鞠「我一期に此、とんばうがへり一たび也」

な  
ノ  
部

○菜 魚 さかな 鍋 菜とは、餌に添合せて用る物を、精進なまぐさともにいへり。常に字音にて菜と云る、即是也。萬葉十一四〇〔一二丁〕に「いせのあまが朝魚夕菜」にかづくとふあはびの貝の片もひにして、此歌に朝魚夕菜とかけるも其故也。又さかなも肴にて、魚菜に渉る名也。なべも魚菜を煮る竈の由也。

古事記、上巻に「宇士多加禮斗呂岐豆」とあるに書紀の「膾沸虫流」(ウシヨウウジガル)とあるを合せみれば、膾汁のと云ふ言葉ではない。又云うて、云ふ言葉ではない。又云うて、云ふ言葉ではない。

「流る」を云なればなり。又「とて」と「とて」といふ言  
も、中古よりいひ、又盪、淫、鑠などの文字をとろ  
かすと訓たるも、や、古ければ也。さて薯蕷の汁を  
とろ、汁といふも、故の同意と聞ゆ。或説にところ  
汁の訛ならんといへれど、右の如く同例あれば、さ

はおもはれす。猶考ふべし。  
「どうけを見よ。

○とろゝじる 「とろけ」を見よ

○戸をたゞく 藤原爲忠集「よもすからそれかと妻戸たゞかれていねもやられぬ軒の荻むら」  
トガル

○とんがる  
古言なるべし。古事記、上巻に「都牟刈之大刀」と  
尖を俗にとんがるといふは、却て

云あれば、尖も本は登牟賀理なるを、登賀流といふ  
は、牟を略也。さて此都牟刈は尾羽張に對へて、カウ峰

の細りたる大刀を云名なりければ、即とんがりと同音も。吾氏の党のひゞては、唯吾考二篇に委く

語也。本居宣の説のいかごよひ、  
弁じたり。見合すべし。

○とンびやうし 一ちやんぎり「を見よ

卷之三

○ない　かたじけない、あらけない、しどけない、冥加ない、心もとないなど云ないにて、なくの音便也。さて此等のなくは、無の意にはあらす。みたき、きいたき、いひたく、ゆきたく、かへりたくなどいふ痛の轉語なれば、かたじけなくは添痛、あらけないは荒氣痛、しどけなくはしとげ痛、冥加

なくは冥加痛、心もとなくは心悒痛の心也。奈と多  
と相通ふ事は、萬葉にいたゞきを、伊奈陀伎、身も  
たゞしらずを、身もたなしらず、事は直知れを、事  
は棚知タチノシ、隔を閉那留、花すゝきを波多薄とよめる類  
多かり。又わな／＼とわな／＼と、うたきとうな  
ると、越前の郷名小名を乎駄と訓る類の如し。又な  
くといひて無の意なるもなきにあらねど、こゝは下

につゝけてつよく勵ます辭をいふ也。  
○ないがしろ 蔑如なり。六帖、題「ないがし」

「枕冊子」、「ないがしろなる物」  
典侍には、齋の典侍あり。三弋實勝、

承和十二年十一月「三木從三位真道の女、菅野朝臣人數爲從四位下兼侍」同十三年十一月「爲從四位典侍」嘉祥三年「從五位上雄河王女廣井女王爲從四位